「巻き込まれ親父の厄災」

作　藤次郎政秀

●エピローグ

閉鎖空間でオートバイにまたがったＴＹが

「こっちは準備いいわよ」

と言って、バイクのアクセルを吹かす。ヘルメットの中のレシーバー越しに

『はいな姐さん』

ＩＡから返事が来る。

「…チョットＩＡ、換気扇ちゃんと回ってんの？なんか排気ガス臭いわよ！」

『ダイジョーブですよ、こちらはいつでも良いですよ。姐さんのタイミングでＯＫっス！』

「それじゃあ、行くわよＩＡ！…３、２、１」

『ハイ！』

Ｙ国際港コンテナ埠頭。大型トレーラーが大きく傾きながら急ハンドルを切る。するとトレーラーの荷台のハッチが開くと同時に一台のバイクが飛び出し、路面に着地して疾走する。

「…おっ、やってるな」

白山亭と書かれたワンボックスワゴン車でコンテナ埠頭に着いたＨＧとＨＹ…その風景を見てＨＧが言った。

バイクはＨＧ達の前を通り過ぎ、ライダーは埠頭にあるコンテナにある的に対して脇に吊っている拳銃を抜きざまに２発撃った。

「あー、当てちまった…」

カメラマンが頭を抱えた。

「カーット！！」

撮影監督がハンドマイクで叫ぶ！

拳銃から発射された弾丸はコンテナにある的の真ん中に見事当たっていた。（弾はペイント弾です。作者注）

ライダーはバイクを撮影スタッフの前に止めると、ヘルメットを取った。バイクに乗っていたのはＴＹ…疾走していたバイクはＴＹの私物…バイクスーツもいつもＴＹが着用している物…

「…どう？」

ＴＹがドヤ顔で言うと、撮影スタッフは各自財布を取り出し、「「負けた…」」「「スゲーな」」と口々に言いながらＴＹにお金を払う。ＴＹは「毎度あり！」と言ってお金を受け取る。

続いてトレーラーが撮影スタッフの側に停車しＩＡが運転席から降りてくる。

「ＩＡ、やったよ！」とガッツポーズをするＴＹ

「はい姐さん」と言って、ＩＡはＴＹとハイタッチをする。

お金を勘定しているＴＹの隣でＩＡがＨＧを見つけて

「ヤバっ、准尉…」

「なに？」

と言って、ＩＡが指さす方向を見たＴＹが「げえ！」と叫ぶ。

「二人とも何してる！」

とＨＧが怒鳴ると、ＴＹ、ＩＡは小走りでＨＧの所に駆け寄る。

「何をやっとる？」

「いえね…撮影スタッフが『走るトレーラーの中からバイクで飛び出して、そのまま拳銃で

的に当てられるか』で賭けをしまして…」

「ほーーぉ、それで？」

と言うＨＧのこめかみがひくつく。ＴＹはそれを見てビビりながらも、

「はい、あの通りに…」

ＴＹはコンテナにある的を指さして言った。

「…そうか、まるで、地元（Ｙ市）出身の有名劇画家の代表作…〝Ｗ７〟みたいだな…」

「本当ですね…わたしも准尉の書斎の本棚から借りて読んだことあるので、そう思いました！凄いわね！ＴＹ」

ＨＹが興奮して言うと、

「いや…それほどでも…ＩＡが上手くやってくれたので…」

ＴＹが照れる。

「ハハハ…これ任務で使えませんかねぇ…」

とＩＡがとりつくように言うと、ＨＧはしかめっ面をして

「何を言っとる！使わないようにするのが任務だ…我々は派手なアクションは極力しない！安全と命第一！！」

「「はぁい」」

と言って、２人供項垂れた。

「これは、ＨＧ社長」

芸能事務所〇×エージェンシー社長のＭＫがＨＧの所に来た。

「白山亭デリバリーサービスのご利用ありがとうございます。ＭＫ社長、ご注文の昼食を配達に来ました」

「それは、どうも…それにしても、お宅のＴＹさん凄いねー、いっそ、ウチの事務所でアク

ション女優として契約してほしい位…」

「そうですか…それは光栄です（社交辞令…社交辞令…）。それは、そうと今日はここ（コンテナ埠頭）でお宅のアクション女優のＣＥさんの撮影では？」

「そうなのよーー、ＣＥの撮影のカメラテストに付き合ってもらっちゃった訳…」

「成程」

「ちょっとあんた達ー手伝ってー量多いんだからー」

ＨＹがワンボックスワゴン車のドアを開けて、配達用のフードコンテナを引っ張り出しながらＴＹとＩＡを呼ぶ

「「ハーイ」」

ＴＹとＩＡがＨＹの呼びかけに応じて軽ワゴン車まで走っていった。

ワンボックスワゴン車から折り畳み机を出して、その上にフードコンテナやポッド類を出した。

その場で受け取りに来た撮影スタッフや俳優陣、エキストラに対して出前のサンドウィッチとコーヒーを手渡す。

それを見ながら、ＭＫはＨＧとコーヒーを片手に話をしていた。

「この現場では、オタクのデリバリーサービスも頼めるからありがたいわー」

「はは、白山亭ならびに碇屋の経営者として御贔屓にしていただいて有難いです。それで、ＣＥさんのその後の様子はどうです？」

「それなのよねー、ＣＥのストーカーより脅迫状が届いて以来、本人が怖がって演技にも影響出ちゃって撮影スケジュールが押されてるのよね…アクション女優なのにメンタルが弱いのがネックね…」

「ウチのＴＹの話では２４時間ＣＥさんのマンションの部屋に泊まり込んで警護していますが、その後ストーカー被害や脅迫状の類も止まったそうですが…」

「うーーん、ストーカーもＴＹちゃんの存在が影響しているのかな？ＩＭのＩＹちゃんみたいに…」

「そういえば、ウチのＩＹもＩＭさんのストーカー被害対策に張り付いていますが…、ＩＹの報告では、先日ストーカー犯を捕まえて警察に引き渡したので、そろそろ任務を解いて欲しいのですが…」

「あれ？ＩＹちゃんは返したわよ？」

「？」

「あー、ＩＭの事だから、また我儘言ってＩＹちゃん引き留めてるんだ…ごめんなさいね。ＩＭが引き留めてる分、ウチが払うから」

「そういう事ですか、そちらのＩＭさんとウチのＩＹは仲がいいですからね…あんまり親密になるとそれもまた困りものですね」

「そーなの、ある程度はビジネスに徹しないとね」

「はい、ＩＹとＩＭさんには私から言っておきますよ」

「ありがとう、ＨＧ社長…ＩＭはなぜかあたしより、ＨＧ社長の言うこと聞くから」

「それは、私が他社の社長だからですよ。それだけＩＭさんはあなたの事を信頼しきっていると思いますよ」

「…そうならいーけど」

ＨＧとＭＫがコーヒー片手に話しているのを見たＣＥは、昼食の配達を終え、片づけを手伝っているＴＹに

「うちの社長（ＭＫ）と話しているのが、あなたの会社の社長？」

「そうですよ」

「ダンディーで結構いい男ね…ＩＭがいつも嬉しそうに話をしているのを聞いてたから、気になってたのよ」

とＣＥが言っているのを聞いて、ＴＹは「はは…（普段のオヤジ臭さを視たら幻滅するだろうなぁ…）」と苦笑いした。

ＣＥが出演する映画は、ＩＭが人質になった数年前のフェリー事件（［巻き込まれ親父の突入］参照）を元に作成されたサスペンスドラマで、視点が人質役の人気歌手ＩＭと、救出する側の親友でＣＥが演じる白バイ女性警察官の視点の両方で物語が展開する。主演は芸能事務所○×エージェンシーの誇る人気歌手のＩＭと同事務所のアクション女優ＣＥの共演、他に豪華俳優陣で撮影が進んでいた。

なので、ＩＭとＣＥの撮影は現在別々の場所で行われている。主にＩＭはロケで使用しているフェリー船内やコンサート会場や控室とかの室内、ＣＥはバイクアクションとかあるので野外での撮影が多く、この様にコンテナ埠頭とかＹ国際港の商店街や港町水上警察署を背景の撮影が多い。

●人員増員

碇屋はＨＧとＳＫ以外の男手…特にエージェント部門の若い男手が居ないので、ＨＧは常々男性エージェントをどうするか考えていた。

また白山亭も夜のＰｕｂ営業はＨＧがやっているので、以前ＨＧがエージェント任務でＰｕｂを度々臨時休業にしていたせいで、常連客…特にＩＦからはか『折角、帝都から電車に乗ってわざわざ来てやっているのに、事前連絡もなく〝臨時休業〟とは、何様のつもり！』と度々怒りのメールが送られてきていた（［巻き込まれ親父の困惑］参照）。（昼の喫茶部は、

ＴＴとアルバイト達で営業しています。作者注）事もあり、誰かいい人はいないかと探していた。

ＩＩは、ＨＧの軍時代の後輩で機甲師団の特殊車両試験部隊でＳＫと共にＨＧの部下だった。ＳＫが足の負傷で傷痍軍人として除隊後も暫くはＨＧの下に居た。

背の小ささ（ＩＹ位）、顔立ち、名前が女性みたいなので周囲からから〝Ｉちゃん〟と女の子呼ばわりされていた。ＨＧの部下になったとき「〝ＩＩ〟…大昔の剣豪にそういう名前が居たねぇ…いい名前じゃないか」と、親がつけた名の意味を教えずに即答で褒めてくれ、ＳＫ共々ＩＩを普通に扱って（たまに冗談で〝Ｉちゃん〟呼ばわりしているが…）いたので、ＨＧに従っていた。

軍縮によりＨＧはリストラされるが、ＩＩは暫く正規軍に残ることができた。ＩＩは除隊後、Ｋ市の繁華街でＢａｒの雇われマスターをしていたが、都市再開発計画の地上げにより、勤めていた店が閉店する事になり、次の転職先を考えていたところ、たまたまＹ市の商工会議所が主催するエージェント会社の交流会の集まりの後にＨＧとＳＫがＩＩのＢａｒに立ち寄り、再会を果たし、ＨＧにスカウトされ、そのまま白山亭の夜のＰｕｂ営業を任された。

ＨＧ同様〝特別銃器携帯・使用許可証〟の限定解除をもつ数少ない人材。なので、碇屋のガンスミス部門とエージェント部門の手伝いもする事になった。

●ＡＭ

白山亭の入り口のドアが開き、一人の男が入って来た。

「いらっしゃいませ」

ＩＡが応対する。男は店内を見回しているので、

「こちらにどうぞ」

と言って、窓際のカウンター席に案内する。
「メニューです。お決まりでしたら、お呼びください」
と言って、ＩＡは席を離れる。暫くして、男の手が上がり、ＩＡが男の元に行く。
「すみません、この白山亭オリジナルコーヒーと、あと白山亭サンドウィッチを…」
「はい、白山亭オリジナルコーヒーと白山亭サンドウィッチですね」
「はい、それを」
「畏まりました」
ＩＡがバーカウンターに行き、「オリジナルコーヒーとオリジナルサンドウィッチを…」とＴＴに言う。
男は、再び店内を珍し気に眺めて、レジ後ろのパネルと前の看板「ミルクホール白山亭」が目に留まり、席を離れて見に行く。こういう行動をする人は、始めて来店した人に多い。ＩＡは気を聞かせて、「よろしければ、これをどうぞ」と言って、レジ裏のパネルをまとめたパフレットを渡す。
「ありがとうございます」
男は、ＩＡから貰ったパンフレットを席に戻って眺めていた。やがて男が注文した品が出来上がり、ＩＡが「お待たせしました。白山亭オリジナルコーヒーと白山亭サンドウィッチです。ごゆっくり…」
と言って男の席に注文の品を置くと、一礼して席を離れた。
その時、
「キャーー、またあんたかーー！」
と言う女性の叫び声が聞こえ、男は飲みかけのコーヒーカップを置いて振り向く。
その場に女給（港町警察署の女性警官のアルバイト）が、一人の男の腕を背後に回して取り押さえている光景が目に入った。

「急いで、社長呼んできて！」
と男を取り押さえた女給の言葉にバーカウンターに居るＴＴが頷き、内線電話をかける。
「今日と言う今日は許さないわよ！いくら社長の知り合いだからと言って、ここは社長がジェントリの空間と決めてんだから、そこで人の尻触っていいと思うな―！！」
男は「(確かに言う通りだ…それにしても、ここの従業員は心得があるな…)」と感心して事の成り行きを見守っていた。
やがてバーカウンター横の入り口から、一人の男が入って来た…ＨＧである。
ＨＧはそのまま店内で女給が男…痴漢を取り押さえている所に行き、痴漢に対して「…また、お前か…」と言った。痴漢の男はこの商店街にある葛葉組の構成員…普段は派手なシャツとジャンバーを着て街を闊歩しているが、流石に白山亭に入る場合は、白シャツにスーツ姿…いや、そうしないとＨＧと組長からこっぴどく叱られる。なら、わざわざ白山亭に入店する事はないのだが、この男、制服フェチであり、特に白山亭の女給服が好きでわざわざ店内に入ってきて、つい出来心で女給の尻を触る悪い癖がある(笑)…
「この前、言ったよな『次やったら、警察に突き出す！』と」
「へい…」
と言って、痴漢は項垂れた。ＨＧが「君、そのまま職場（女給の女性警察官の所属している港町警察署）に連行していいよ！」と言ったので、痴漢が慌てて女給を振りほどき、逃げ出した。その途中に先程の窓際のカウンター席に座っている男の側を通ったので、その男は逃げてきた痴漢を捕まえた。
追ってきたＨＧに
「ご協力感謝します」
と言って、痴漢を引き渡して貰うと
「あれ？もしかしてＨＧ教官ですか？」

と男は言った。ＨＧは男の顔を見て「…誰だっけ？」と言ったので、男がこけた。
男は立ち上がり、
「俺ですよ、俺…民兵会社ＤＫに居た頃、体術訓練で教官に何度も締め落とされた…」
「…ああ…てっ、誰？」
と言うと、また男がコケル。
「民兵会社ＤＫであなたに教えを受けた、ＡＭですってば！」
と男…ＡＭが言うと
「民兵会社ＤＫの社員に教え子はたくさんいるが、男は知らん！」
と言って、ＨＧは腕組みしてふんぞり返る。ＨＧが腕組みしたので、男はそろりとＨＧから離れ、一目散に店外に逃げ出した。
「准尉…痴漢が逃げました…」とＴＴが言うと、ＨＧは「えっ？」っと、言って横にいるはずの痴漢男を見ると確かにいない…（漫画なら、痴漢の居た位置に点線で人物のマークがあり、その中に〝こつぜん〟とでも書いてるような感じ。作者注）
「あーー、お前のせいで逃げられたじゃないかー」
「それ…俺のせいですかー、そもそも腕組みしてふんぞり返ったあんたのせいだろう！」
とＡＭが言うと、ＨＧはＡＭの肩をポンと叩き、
「お前、漫才の腕が上達したなＡＭ…」
と言った。ＡＭは
「あのぅ…ＨＧ教官…俺と知っててわざと？」
「うん」
と言って、ＨＧが頷く。「（この〝オヤジ（ＡＭの新入社員時代はＨＧを陰で〝オヤジ〟と呼んでいた）〟…相変わらず人をくった事を…）」と思ったＡＭは歯噛みした。
「まぁ、こっちに来い」

と言って、ＡＭをバーカウンター席に連れて行くと、
「ここ…ＨＧ教官の店なんですね」
「そう…ばあさんの店を継いだ」
「准尉、この方知っているのですか？」
とＴＴが訊ねると、
「そうか、お前さんが結婚退職した後か…こいつはＡＭと言って、俺の漫才相手だ」
とＨＧがシレっと言うと、ＡＭがコケル。ＡＭがＨＧの事を〝教官〟と呼んでいる時点でＨＧの民兵会社時代の教え子である事はＴＴでも分かる。

「…そういえば、教官」
「なんだ？」
「さっきの痴漢どうします？」
「…ん？あれ…あれの居場所は知ってるからいいの…ほっとけばまた来ると思うよ」
「なんで？」
「あれは、俺の身内（葛葉組の組長はＨＧの親戚）の手下（葛葉組の構成員）だから、後で親分（組長）に連絡して叱ってもらうからね。それを知ってるから、彼女も後を追わない」
と言って、ＨＧは店内で普通に仕事している痴漢を取り押さえた女給を指した。
「…と言う事は、さっきはわざと逃がしましたね？」
「わかっちゃったか…」
と言って、ＨＧが笑う。
「相変わらず、教官は人をくってますね！」
「俺は食人族ではないぞ…でも、若い女の子は美味しそうだな…」
とＨＧがシレっと言うと、

「(このオッサン！)」
とＴＴは苦笑いして突っ込む。
「そーーじゃなくて！」
ＡＭが言うと
「…な、いい漫才相手だろ？…こいつイジリ甲斐があるんだ。そこだけは変わらんな」
とＨＧはＴＴにＡＭを親指で指して言った。それを聞いたＴＴは苦笑いをした。

「ところで、お前さん今何をしている」
「ここでコーヒーを飲んでいます」
とＡＭはシレっと言ってＨＧに返す。
「そーか、美味しいか？」
「はい…じゃなくて、今俺が何の仕事をしているのか興味ないんですか！」
「うん、ある」
と言って、ＨＧは思い出したように、
「そういえば、ＡＭおまえ。会社退職後に海外逃亡したとお前さんの同期に聞いたことあるが…なんでも、女の子孕ませたとか、借金が嵩んだとか、ヤバイモノに手を出したとか…(後半ＨＧの嘘です(笑)作者注)」
とＨＧが言うと、ＡＭは席から転げ落ちる。
「イテテ…」
「こけ方が悪いと怪我するぞ！」
「気を付けます…じゃなくて、なんでそんな話にぃ…？」
「違うのか？」
「違います！」

「真相を報告しろ！嘘偽りは申すな！！」
ＨＧが軍時代の独特の口調で言うと、
「ハッ！」
と言って、反射的に直立不動の姿勢になり、ＡＭは話し出した。
「自分は、退職後に色々な仕事を転々としました。その間にコツコツとお金を貯めてＡ国に行き、そこで探偵のアシスタントをしたり、独立してボディーガードをしたりしていました」
「そうか…って、嘘だろう？」
ＨＧが訝しがって訊ねると
「ホ・ン・ト・ウです！で、向こう（Ａ国）の物価の高騰で仕事にあぶれたのと、母が亡くなったと知らせがあったので、皇国に帰ってきました」
「それは、大変だったな…特にお母さんについては…」
「はい」
「で、今は？」
「今は新たな仕事を探している最中です」
「ふーん…そこは、『ここでコーヒーを飲んでいます』だろ？」
「あのですねーー！」
真剣な話をしているのをＨＧに茶化されたので、ＡＭは怒った。
「准尉…チョット…」
ＴＴがＨＧの袖を引く
「なんだ？」とＨＧが言うと、ＴＴはＨＧの耳元に囁く
「(…あの、差し出がましいですが、あの人Ａ国でボディーガードしていたんですよね…)」
「(…そのようだな)」
「(准尉、日頃から〝男の子が欲しい（すみません、碇屋の男性エージェントの事です(笑)作

者注）〃と言っているので、この際…）」
「（お前もそう思うか？）」
「（はい）」
とＨＧとＴＴがヒソヒソと話しているので、ＡＭは不審に思って、
「教官…なにをコソコソと…〃男の子が欲しい〃とか聞こえましたが？」
とＡＭが訝し気に尋ねると、
「いや…なに、今晩ナニするかと…」
「あら…ヤダ…」
と言って、ＴＴがＨＧの背を叩く。

「ＨＹ入ります」
と言って、ＨＹがバーカウンター横の従業員出入り口から入ってくる。ＡＭは女給姿のＨＹを見て
「あれ？もしかしてＨＹ先輩（ＨＹはＡＭ入社時の教育・訓練にＨＧのアシスタントをしていました。作者注）？」
と言うとＨＹは
「えーーと、誰だっけ…」
と言った。ＡＭがコケル。
「ほら…みろ」
ＨＧが言うと、ＡＭは
「俺です。俺…民兵会社ＤＫに居たＡＭですよ！」
「ＡＭ…ＡＭ…そんな人居たっけ？」
とＨＹが額に手を当て考え、次に天井を見上げてから言うと、ＡＭが椅子から崩れ落ちる。

「エーッ、本当に忘れてます？」
とアピールするＡＭにＨＹは素直に、
「はい」
と答えるが、ＨＹも少しＡＭの事を思い出したようで、
「じゃあ…ＴＹ知ってる？」
「はい、俺の２年先輩です」
「ふーーん、あの頃の子…じゃＩＦ隊長は？」
「もちろん知ってます。教官と一緒に飲みに連れて行って貰った覚えがあります」
「教官って？」
「ＨＧ教官の事です！」
ＡＭの言葉にＨＹは「(准尉の事、教官て呼んでんだ…)」と思って、
「それで、大体絞れたけど…でも誰？」
とＨＹが言うと、ＨＧが「お前、存在感無いなぁー、そんなんじゃグランプリ狙えないぞ！」
と言うと、「何のグランプリですかー！」「漫才の…」「そんなの、目指しません！」と言い
返している間に、ＨＹがＡＭを指さして
「あーー、思い出した！」
「思い出しましたか？」
ＨＹの言葉にＡＭは明るい顔でＨＹを見ると、
「よく准尉にイジラレていた子！」
と言って、ＨＹは笑いながらＡＭを指さした。
「そんなーー（泣）」
と言って、泣き顔になったＡＭは、ふと思い直して、
「でも、なんでＨＹ先輩がここに居るのですか？」

「あっ、わたし？わたしは准尉に弟子入りして、ここに住み込みで働いてるの」
「准尉って？」
「この人」
と言ってＨＹはＨＧの腕を取る。
「〝弟子入り〟って…？もしかして、〝嫁入り〟の間違いじゃないんですか？」
「あら…漫才の腕上げたわね」
と言って、ＨＹは頬を赤らめた。

ＨＧとＨＹがＡＭをイジリ出したので「（やれやれ…この師妹は…）」と思ったＴＴ
「横から、ゴメンナサイね。私はＴＴ…この店の従業員なんだけど…」
と言ったところで
「えっ、教官の奥さんじゃないの？」
とＡＭが驚いた。それを聞いてＴＴは「あら…」と喜び、ＨＹは膨れる。それを見たＨＧ
「そろそろ、『あんたとはやってられんわ、いい加減にせい！』と突っ込みが入りそうだから、真面目に言おう」
とＨＧが言うと、一同「「（突っ込み指南はいらん！）」」とＨＧに逆に突っ込む。
「俺達は、この店の他にエージェント派遣会社をやってるんだ。〝碇屋〟いう会社名だ」
「えっ？」
ＡＭが驚くと、
「今、お前（ＡＭ）の話で、Ａ国でボディーガードをやっていたと言うのを聞いて、碇屋にスカウトしたいと思うのだが、どうかね？」
「…それって、真面目な話ですか？」
「そう、大真面目だ」

と言って、ＨＧは胸を張った。それを見たＡＭは「（そうゆーう所、今一つ信用できないんだけど…）」と思いつつ、

「さっきも言いました通り、現在職探し中です。俺のボディーガードの経験を買ってスカウトしてくれるのであれば、是非に」

「分かった。でも一応入社試験をしよう…今からいいかね？」

「はい」

「おい、ＭＰ！」

「ハイネ」

「ちょっとおいで」

ＭＰがバーカウンターの前に来る。

「彼を碇屋のエージェントに雇いたいんだが、これから港町警察署の道場で入社テストするから、ちょっと相手を頼めるか？」

「ハイネ…ＨＧこいつと殺る（体術・組手等の格闘術の相手の事）のカ？」

と言って、ＭＰはＡＭを指さす。

「そうだ」

とＨＧが言うと、ＡＭはＭＰをまじまじと見て、

「教官…ここの店って赤鬼が居るんですね」

と、本気だかボケだか分からない事を言ったので、

「ダレガ、赤鬼やネン！（他の人にもよく言われています。作者注）」

とＭＰが怒って突っ込みを入れたので、ＨＧは「（ＭＰも鍛えようによっては漫才の相手になりそうだ）」と思った。

その後、ＡＭの格闘技と射撃のテストをして弟子入りを決定。エージェント部門の実行部

隊の男性1号となる。ＡＭは男性なので、母屋に住まわせるわけにも行かず、男屋でＳＫの隣の部屋に住まわせる事にした。

●ＡＭ入門

晴れて、ＨＧの５番目？の弟子（１番ＩＹ、２番ＨＹ、３番ＴＹ、３．５？版ＩＡ、４？番ＭＰ、５？番ＡＭ）となったＡＭ。

ＡＭは、Ａ国発行の〝国際特別銃器携帯・使用許可証〟を所持していて、ＡＭが所持している拳銃はＡ国では古くからなじみの深い拳銃…しかし、弾丸の口径がＨＧを初め他の娘どもの拳銃より大きい（４５口径。ＨＧ達は３８口径を使用）ので、ＨＧ達の使用している拳銃と共通の口径のＡ国製の物をＨＧが渡した。

（各自の拳銃は、ＨＧ：Ｓ国、ＨＹ：Ｄ国、ＴＹ：Ａ国、ＩＹ：Ｄ国、ＩＡ：Ｓ国、ＭＰ：Ｄ国、ＡＭ：Ａ国、ＴＴ：Ｄ国、ＳＫ：Ｏ国、ＩＩ：Ｉ国）

その晩は、ＳＫ（ＩＩは碇屋の従業員ですが、いまの時間は白山亭の夜のＰｕｂ営業時間なので店に居ます）とＴＴも交えて母屋の食堂で入門祝い(笑)が開かれた。とは、言えＨＧの弟子のＴＹとＩＹは任務先なので出席できず、リモートでの参加になった。

「皆様、既に自分の事を知っている方もいらっしゃいますが、改めましてこの度ご縁があり、ＨＧ教官…もとい！准尉の弟子に入門しましたＡＭです。准尉とは民兵会社ＤＫで入社した時にお世話になりました。その後、職を転々としてＡ国に渡って探偵の助手とかボディーガード等をしていました。向こうの物価高騰と身内の不幸により、皇国に帰ってきました。皆様、どうぞよろしくお願いします」

と言って、ＡＭは深々と頭を下げる。

「と、言う訳だ…これで碇屋に若い男の芸人が入ったので、コントのレパートリーが増えるようになった！」

とＨＧが言うと、全員椅子からコケル（お約束！作者）

「「違います！」」

全員からの突っ込みを受け、ＨＧは

「ジョーダン…冗談！…これで晴れて碇屋に男のエージェントが誕生した、みんなよろしくやってくれ！…なお、こいつはイジリ甲斐があるやつだから、そっちの方もよろしく！！」

とＨＧが言うと「イジリは要りません！」とＡＭが叫んだ。

「まぁ、そういう事だから、まずは乾杯！」

「「カンパーイ」」

「わたしはＨＹ、もう知ってるから、これ以上はいいわね」

「はい、ＨＹ先輩。よろしくお願いいたします」

『ヤッホー、ＡＭ。生きてたんだ。わたしはあんたの同期からヤバいことやってＡ国に逃亡したと聞いていたけど』

「ＴＹ先輩…そんなぁ…（泣）」

「ほれ、俺が言ってた通りだろ？」

「教官ー（泣）」

「姐さんが知っていると言う事は…」

とＩＡが訊ねると

『わたしの２年下の後輩…っていっても、こいつ会社は３年程で辞めたけどね』

「私とＩＹの先輩になるんだ」

『私達の年下の後輩は居ないのね…』

とＩＹが残念そうに言うと、ＴＹは

『そりゃ、そーでしょ、あなた達の次の年度の後輩達には准尉は教育・訓練していないし、定年退職したしね』

『そうでした…初めましてＡＭ先輩、私はＩＹと言います。よろしくお願いします』

「わたしは、ＩＡです。ＩＹと同期です。よろしくお願いします。ＡＭ先輩」

「ワタシＭＰネ、ヨロシクＡＭ」

「皆さんよろしくお願いいたします」

「私は、ＴＴ。昔、民兵会社ＤＫに居たことあるのよ。よろしくね…私、鍵屋の従業員じゃないけど、准尉の弟子達のバックアップをしているの」

「はい、ＴＴ先輩」

「俺はＳＫ。ＨＧと一緒に碇屋の共同経営者だ」

「はい、よろしくお願いいたします」

「ＴＴ…おめぇは、こいつの事知らないのか？」

とＳＫが言うと、ＴＴは

「はい、彼が入社した時には私は結婚して退職しましたので」

「…そうか」

『『なに？新しい人？』』

ＩＭがＩＹのスマートフォンに、ＣＥがＴＹのスマートフォンのリモート会議に割り込んできた。ＡＭを見て

『あら…いい男。今度護衛依頼は、この人に頼もうかなぁ…』

とＣＥが言うと、ＴＹが『エーー』と言って残念そうな顔をする
『あたしは、ＩＹでいいわ』
今やＩＹと親友と言える仲になったＩＭは言う。
ＨＧはここで、ＩＹに『任務終わってるんだから、早く帰ってこい！』と言いそうになったが、ＣＥとかの手前、言うのを思い留まった。

食堂から男屋に戻るＳＫとＡＭ。ＨＧがＡＭを呼び止める。
「ＡＭ、ちょっといいか？」
「はい、教官。なんですか」
「あのな…言い忘れてたけど、この館幽霊が出るからな」
と言って、ＡＭを怖がらせようとしたが、
「そうですか…」
ＨＧはＡＭの反応に「(つまんねー奴だな)」と思った。
「幽霊の類は怖くないか？」
「はい…教官に締められるよりは怖くないです…それよりも、教官の親父ギャグの方が薄ら寒いです」
とＡＭが平然と言うと「(こいつ…)」と思って、苦笑いした。
ＳＫが笑いをこらえていた。

●ＫＪとＡＭ
「今日は、ＩＹさんに会えますように…」
と白山亭の入り口で簡単に居住まいを但し、勢いよく入り口のドアを開けると
「いらっしゃいませ」

と男の声で言われたので、ＫＪは仰天した。ＫＪを迎えたのは白山亭ホールスタッフの制服を着用したＡＭ

「ＫＪ様ですね…いつもの席は空いていますのでどうぞ…」

と言って、ＡＭはＫＪがいつも座る入り口付近のカウンター席を示す。そこには〝予約席〟の札が置いてあった。いつもはなにも置いていないので、二度驚く。

「君は？」

「この度、ＨＧ社長に弟子入りしましたＡＭと申します。以後お見知りおきを…」

と言って、ＡＭはＫＪに一礼した。

「弟子って…それじゃあＩＹさんとかＨＹさんとかと同列…」

「はい、そうなります」

「それじゃ…君もＨＧ社長の地獄の入社テスト受けたの？」

ＫＪはＩＹに近づきたくて、以前無理言ってＨＧの鍵屋入社テストを受けて散々な目に遭ったことを思い出した。

「はい」

「よく生きてたね…じゃなくて、よくＨＧ社長が認めたね…誰と戦ったの？」

「はい、あそこに居るＭＰさんと組手勝負してから、ＨＧ社長と戦いました」

「どうだった？」

「ＭＰさんとの勝負には勝ちましたが、ＨＧ社長にはまた締め技で落とされました…ハハ」

と言って、ＡＭは頭を掻いた。

「えっ？あの赤鬼と戦って勝ったの？…イテ！」

「ダレガ、赤鬼やネン！」

と言って、いつの間にかＫＪの背後からＭＰが頭を鷲掴みにする。

「イタタ…お客に何をするんだ！」

「ＩＹにつく悪い虫は、お客じゃないネ」
「そうですか…でも本当に痛いから離して」
「ところで、君」
「はい」
「ＩＹさんはどうしたの？」
とＫＪに聞かれ、ＡＭは確認のためにバーカウンターに居るＴＴを見ると、首を横に振っているので、
「任務中につき申し上げられません」
「また、入院しているの？」
「それも申し上げられません」
「なんだよーー」

●ＭＺ再び
「いらっしゃいませ」
ピチッとしたスーツを着こなす金髪女性が白山亭に来店した。対応した女給が
「うわっ…外人…」
と驚く。急いで店内に居るはずのＭＰを探す。奥のステージの付近のテーブルの片づけをしているＭＰの姿を見つけ、
「ＭＰ！ちょっと…」
と呼びかけると
「ハイネ」
とニコヤかに言ったＭＰが入り口に居る女性を見て、顔をしかめる…
「オマエ…ＭＺ！」

「ハァイ！ＭＰ」
と陽気に手を上げるＭＺ
「何しにキタ」
「…あらぁ…お客様に対してなんて態度を取るの？お店の教育がなってないわねぇ…いや、この場合躾かしらぁ～」
それを聞いて苦笑いするＴＴ…

「まぁ…こちらにどうぞ…」
ＭＺがＭＰと何かトラブルを抱えているらしいのを察し、またＭＺが皇国語を話せると分かった女給がカウンター席に案内する。
「ありがとう」
と言って、カウンター席にＭＺが座ると、
「いらっしゃいませ、ＭＺ様、ご注文は何にしましょう」
と言って、ＴＴがメニューを出す。奥ではＭＰがＭＺに対して舌を出して威嚇していた。
「白山亭ブレンドコーヒーとＨＧ社長を…」
「畏まりました…白山亭ブレンドコーヒーと社長のＨＧですね」
「(何時から、准尉はメニューに載ったのだろう…)」とＴＴは独りノリ突っ込みをした。
サイフォンでコーヒーを淹れている間、ＴＴは内線電話でＨＧを呼び出す。
『ナニ？ＭＺが俺を注文したぁ？』
と電話口でＴＴが「ＭＺ様が来店され、准尉をご注文されました…」と冗談で伝えると、電話口でＨＧが反応する。それを聞いていたＭＺが苦笑する。

やがて身なりを正して、ＨＧが白山亭内に入る。

「いらっしゃいませ、ＭＺ様…私を御所望だそうで…」
「ハイ、確かに注文しました」
ＭＺのジョークに乗っかり対応したＨＧの返事に、ＭＺも自分の言い出したジョークに再度乗っかる。
「何用で？」
「ハイ…今日は美味しいコーヒーを飲みに来たのと、こちらからのセールスに来ました」
「コーヒーは出しますが、セールスはお断りしています」
ＨＧは塩対応で返す。
「…そんなことおっしゃらないで…これが売れないと私、国で病気で伏せっている両親に仕送りできなくなりますぅ…」
と言って、わざとスーツの袖を目に当て泣く真似をした。それを見て「（このパッキンねーちゃん…けっこうやるじゃん！）」と、ＭＺの芝居に感心した。
「こんなオンナの話聞く必要ないネ」
いつの間にＭＺの後ろに来たＭＰが言う。ＨＧは折角の新手の漫才相手が見つかったのに水を刺されて
「…ＭＰ」
「ハイネ」
ＨＧは無言でＭＰを追い払う仕草をした。それを見たＭＰは怒りで顔を真っ赤にして、無言でテーブル席から片づけた食器を乗せたトレー毎ガチャリと音を立ててバーカウンターに置くと、振り返ってドスドスと音を立てて店の奥に歩いて行った。
「ＨＧ社長…店員の躾がなっていませんねぇ…」
とＭＺが怪しい目つきで言うと、ＨＧが
「はい…おっしゃる通り…申し訳ございません」

と口では言うが、ＨＧ本人は平然としていた。

「…で、貴女の国の両親に免じて、話は伺いましょう」

とＨＧがＭＺとの漫才を再開させると、「（まだやんの？）」とＭＺ本人とＴＴが驚く。ＨＧのやる気に負けたＭＺは、

「はい、今日お持ちしたのは、私の本国Ｄ国で作られた最新のインナーの紹介です」

とＭＺは明るい口調でセールスを始めた。

「インナー…？」ＴＴは「（この女…セクシーランジェリーの訪問販売でもするの？）」と思った。

「ナニナニ？下着？」

と言っていつの間にＨＧの後ろからＨＹとＩＡが覗き込む。ＨＧは「わっ！」と驚いて、「なんだ！お前ら？」と言うと、二人は「だって…准尉が注文されたと聞いたんで…心配になりまして…」と言う。それを聞いた、ＭＺはニッコリと笑って、説明を続けた。

「このインナーは、ただのインナーではありません。防弾仕様になっております」

「（あっ、そっち…（エージェント部門に必要））」と思って、ＴＴは苦笑した。

「この防弾インナーは最新の素材でできていて、薄くて軽いどころか、防弾性も従来のモノより３倍の威力はあり、至近距離のマグナム弾や２００メートル離れたところからのアサルトライフル弾もストップさせます」

と、言って持っているカバンからタブレット端末を取り出し、ビデオを見せる。そこにはインナーを着用したマネキンが色々な銃器で撃たれていた。それを見たＴＴは驚き「（マネキンが可哀想…）」と思った。（そっちかい！作者）

ビデオを見せてＭＺは、ドヤ顔で

「本来、我々（ＭＺの所属するＤ国エージェント機関ＤＳＦ）と提携していただければ、こ

ういったモノや装備は無償で提供いたします」
と、高飛車に言う。ＨＧは「(まだウチ（碇屋）との提携にこだわりがあるんだ…)」と思った。
「今日は、美味しいコーヒーに免じて、初回特典…このインナー上下セットにさらにもう１セットをつけて２セット×万皇円を今なら、△万９８０皇円！２セットでこの値段ですよぅ～」
ＭＺはまるでテレビの深夜の通販番組調に言った。それを聞いたＨＧ
「ふむ…」
「さらに、防弾ベスト１着も付けて、今なら◇△万９８０皇円！どうですかーお客さん！」
とＭＺが畳みかける。
「うーん」
と言って、腕組みをした。ＨＹ達娘は無言で「「(パパ…これ欲しい！買ってー(笑))」」とＨＧに圧力をかける。
「そうだな…ＩＹが撃たれたことを考えると、この娘達の命が大事だからな…」
と言うと、ＨＹ達は手を取り合って「「やったー！」」と喜ぶ。
「…しかし、ちょっと気になる事がある」
「何ですか？」
「このインナーを着用した場合、インナーの締め付けや素材による動きの制約が心配だ…我々の仕事ではＤ国の国情と違い、銃器の使用より、体力を使った格闘術や護身術を使う場面が多い、いくら防弾性に優れても、その分、機動力が落ちるのは避けたい。それと、刃物に対する防御について知りたい」
とＨＧが言うと「「(…それは確かに)」」とＨＹ達は思った。
「そうですね…その懸念は理解いたします」

とＭＺが言うと、ＨＧは
「できればサンプルが１セット分貰えれば、こちらでテストしてその結果如何で購入するかどうか決めたいが…」
「成程…そうですね。ＨＧ社長がおっしゃる事は分かります。サンプルを１セット差し上げましょう…きっと、気に入ってエージェントの皆さん買っていただけますよ」
「自信があるんだ」
「はい…あと、このインナーを既に着用している人がそちらにおりますが…」
「「誰？」」
「あそこの脳みそ筋肉女ですわぁ」
と言って、ＭＺは店内の奥でいじけているＭＰの方を振り向いた。「「えっ！」」と言って、バーカウンターに集まっている一同驚く、その光景を見てＭＺは不審に思い、
「ＭＰチョット…」
ＭＺがＭＰを手招きした。それに対して不服そうな顔で
「ナンダＭＺ」
と言って、店の奥からＭＰかずかずかとＭＺの所に来た。
ＭＰを見るＨＹ達…ＭＺは
「貴女、最新式防弾インナーについて皆さんに言った事なかったの？」
と聞くと、ＭＰはハッとなり
「…ワスレテタ」
「ＭＰ！貴女ねー…だから、当局（Ｄ国のエージェント機関ＤＳＦ）内で〝脳みそ筋肉女〟って、言われるのよ…全く同期として情けないったらありゃしない」
「ムキーーー」
と怒りに紅潮したＭＰを見たＨＧは「（本当に赤鬼…）」と思った。

後日、ＭＺがＩＹに合うサイズのサンプル一式と、カタログを送ってきた。早速ＩＹが着用して、港町警察署の道場でＭＰやＨＹ相手に格闘技などの試合や港の倉庫でエアガンを使用した模擬戦をした。ＩＹの報告では「市販のインナーと同じフィット感でした…ただ、通気性が悪くて汗が吸収されにくいのと乾きにくいです」と言った。皇国より年平均気温が低く空気が乾燥しているＤ国と違い、温暖で湿度が高い皇国ならではの欠点が見つかった。

最後にＹ市銃砲試験場のシューティングレンジで、的にして銃器で撃ってみたり、刃物を刺してみたりしたら、ＭＺのセールス通りの結果が証明され、通気性の問題を除けば有効であると判断された。

ＨＧはＭＺにインナーの通気性について、改良が出来ないかを条件に価格交渉して、ＨＧ、ＴＴが上下３セット分、ＨＹ、ＴＹ、ＩＹ、ＩＡとＡＭが上下５セット分と同じ素材の防弾ベストを経費で購入し、後は、ＭＰを含めて各自追加（色とかデザインの好みでの追加）分は自腹購入する事で、ＭＺに発注した。

●ＨＧ入院す

「よるーのハイウェーに…早く帰らんと、ＨＹに叱られるぅー」

と、歌いながらＨＧは夜の帝都都市高速道路を愛車で走る。日中、Ｏ県領地知事ＯＴ殿下から警護依頼が入った。いつもならＴＹを就けるのであるが、ＴＹは芸能事務所○×エージェンシー所属のアクション女優ＣＥの警護任務で２４時間ＣＥのマンションに居るため、急遽ＡＭに任せることにした。こういった時にＡＭのＡ国でボディーガードをしていた経歴と経験が役に立つ。

帝都の皇王省（日本の宮内庁に相当）敷地内にある邸宅（帝都外に居る皇王家の人が来た時に使用する邸宅…Ｏ県領地知事ＯＴ殿下は皇王の弟にあたる）にＡＭを連れて行った。

ＯＴ殿下は、いつも警護を引き受けてくれているＴＹの代わりにＡＭをＨＧが連れてきたのを訝しがったが、ＴＹが別案件で任務中であるのと、ＡＭが海外でのボディーガードをしていた経験をＨＧが話すと納得した。

その帰り道、帝都都市高速道路で急に渋滞に巻き込まれる。

「あれれ、渋滞かよ」

と言って、車を止める。次の瞬間…「ワッ！」

夜の母屋。ＨＧの帰宅を待ちながら食堂で盤ゲームに興じるＩＡとＨＹ…ＨＭは食堂のテーブルに頬杖をついて、居間にあるテレビで報道番組を視ていた。

『番組の途中ですが、ここで事故のニュースです。帝都都市高速道路４号線で、渋滞中の車にトラックが追突して、車が炎上している模様です。これは報道ヘリからの中継です。追突された車らしきモノが炎上していて現在消防による懸命な消火活動が行われています…なお、追突された車を運転していた男性は既に救助され、意識不明で病院へ搬送されたそうです。またトラックを運転していた男性も意識不明で病院へ搬送されたそうです。警察の話によりますと、トラック運転手の意識回復を待って事情を聴取するとの事です』

テレビでは高速道路上で炎上している車が映し出されていた。

「最近…こういう事故多いわね」

ＨＹがテレビを横目で見て独り言の様に言うと

「そうですね、トラック運転手の過剰労働による居眠りとか、ストレスによる飲酒とか…ありますものねぇ…」

ＨＭが応じる。ＩＡが盤上の駒を進めて、

「これでチェック！」

「あっ、待った！！」

「ダメですよ、これで2回目ですよＨＹ先輩」
「うーーん、マイッタ！」
とＨＹが言ったところで、母屋の固定電話が鳴る。ＨＭが食堂の子機を取り、
「はい、Ｈです…はい…」
と応対するＨＭを見てＩＡとＨＹが
「准尉ではない様ですね」
「そうねぇ…准尉はここの固定電話にかけてこないものね」
と言っていると、突然
「はい…はい…エーーーーッ！」
とＨＭが驚きの声を上げる。その声に驚くＨＹ達。電話を切り、その場に蹲るＨＭ…ＨＹは驚いて、ＨＭの元に駆け寄り、
「どうしたの？ＨＭさん」
「叔父さん（ＨＧ）が事故で入院したって…どーしよう…」
手で顔を覆うＨＭ。ＨＹとＩＡは「「えーー」」と驚いた。

「…取り敢えず、主な人に連絡しましょう…」
ここで気丈に振る舞ったのはＨＹである。
「ＨＭさんは、准尉のご家族に連絡して！」
「…はい」
と言って、ＨＭはテーブルに置いてあるスマートフォンを手に取った。ＨＹはＩＡに振り返って、
「ＩＡは、軍曹（ＳＫ）呼んできて」
「はい」

「私は…」

と言って、ＨＹはスマートフォンを手に取ると、社員連絡用のメッセージアプリを使って、一斉送信しようとしたが…ふと思いとどまった。

「（ＩＹとＴＹとＭＰとＡＭは任務中だし…）」と思ってＨＹは母屋の食堂にあるホワイトボードを見ながら言った。そこには、各自スケジュールが簡単に書かれていた。

「ＩＹはＩＭさんとまだ一緒に居るのね。ＴＹはＣＥさんの警護でＣＥさん宅に泊まり込み…ＭＰはＤ国大使館で防弾インナーについてＤ国の製造元とテレビ会議中だし…ＡＭは准尉がＯ県領地知事の警護任務に連れてったし…、まだ分からないのにあまり大袈裟にしたくないなぁ…」

と、ＨＹが考えている時に、

「ナニ？ＨＧの奴が事故って入院しただと！」

玄関からＳＫの怒鳴り声が聞こえた。片足が不自由なＳＫは杖を突きながら這這の体で母屋奥にある食堂に入ると、

「奴（ＨＧ）の容態は？」

と訊ねるＳＫにＨＭは狼狽えながら、

「警察からの電話では意識不明としか…どーしよう…」

看護師で近所の総合病院で働いていて、日常緊急搬送される事故による重傷患者を見慣れているはずなのに、いざ身近な肉親の事となるとこうも気が弱くなると言う事を、ＨＭを見てＨＹは思った。

「まずは、奴が搬送された病院に行こう！ＩＡ！車の用意だ」

「はい」

「ＨＹ！」

「はい」

「連絡は？どこにした？」
「はい、准尉のご家族にはＨＭさんにお願いしました。会社の人達には社員用（メッセージアプリ）で一斉（通知）しようとしましたが、ＴＹとか任務に就いている人が居るので…それにまだ詳しいことが分からないうちに大袈裟にしたくないと思い、どうしようかと…」
と言うと、ＳＫは安堵して
「ＨＹ、それはいい判断だ…任務中の連中にはまだ知らせるな。取り敢えず連絡先は主要な者だけでいい…ＫＭ、ＴＴ、ＩＩ（この人達は、外部からの通勤）だけにしろ」
「はい」
ＨＹはＳＫの言った人達に対してショートメッセージの第一報を送信した。

ＩＡが運転するワゴンに乗ってＳＫ達はＨＧの搬送された病院に向かった。

ＨＧが搬送された病院行くと、待合室に警察官が居た。ＨＭが警察官の元に行き、
「あの、私連絡があったＨＧの身内の者とその関係者ですが…」
「はい、ＨＧさんのお身内と関係者の方々ですね…お身内の方と入院している被害者ご本人の続柄を教えていただけますか？
「叔父です。私はＨＧの兄の娘です」
「分かりました…まずは落ち着いて座ってください」
と言って、警察官はＳＫ達を待合室の席に座る様指示をした。
「あの、叔父の容態は？」
「現在検査を終え、ＩＣＵに居ますが、意識不明だそうです」
「叔父に会わせていただけますか？」
「…それは、今現在では難しいと思います。ちなみに身内は姪子さんお一人ですか？」

「私は叔父と同居していまして…じきに叔父の両親と私の両親がこちらに来る予定です」
「分かりました。ありがとうございます」

ＫＭ、ＴＴ、ＩＩが続々と病院に駆けつける。みな駆けつける度にＨＧの容態をまず聞かれ、その度にＨＭが説明していた。

そして、ＨＧの両親がＨＧの兄夫婦と共に病院に来た。それまで泣かなかったＨＭが母とみられる人に抱きついた。
「ＨＭ…この人達は？」
ＨＧの母親であろう老女が訊ねる。ＨＭがこの状態では説明が出来ないと思ったＫＭが
「おばちゃん、この人達はね。ＨＧの会社の人達よ」
ＫＭはＨＧの従姉（ＨＧの母の兄の娘）であるので、ＨＧの両親と兄夫婦と面識がある。
それを聞いて
「こんな夜遅く、わざわざ…ＨＧの母です。息子がお世話になっています」
「ＨＧの父です。息子の為に来ていただきありがとうございます」
「ＨＧの兄です」
「ＨＧの義姉です。義弟と娘がお世話になっております」
と言って、頭を下げた。

警察官は病院に来た人達の挨拶が済んだと思ったところで、「帝都警察庁交通機動科の者です」と言って、ＨＧの容態と事故の状況について話をした。

「…と言う事でして、現在追突した方のトラック運転手も意識不明で、意識が戻り次第事情聴取の予定です」

と警察官が言ったところで、ＩＣＵから医師が出てきて、警察官が「被害者の主治医です」と紹介した。主治医の話では命は取り留めたものの意識不明との事。

これ以上はどうしようもなく、ＨＧの両親が

「本日の所はお引き取り下さい」

と言ったので、ＫＭとＨＭにＨＧを任せてＳＫ達は一旦引き上げることにした。

●社長代理

ＨＧが入院する病院から引き揚げてきた、ＴＴ達後から駆けつけ組を含むＳＫ一行。母屋の食堂でＳＫが開口一番

「ＨＧが入院して意識が戻らない以上、どうにもならん…できることは祈るしかない…俺は日頃から奴とこういう事が起こる事を想定して話し合いをしていた。俺は奴程頭が良くないから、経営云々はよくわからんが、社長代理として現状維持ならできる…ここに居るのは、幸いＫＭを除き白山亭と碇屋の主要メンバーが居るので、ＨＧの意思を伝える」

と言って、ＳＫはそこに居る一同を見回し、

「まず、白山亭は今まで通り昼間ＴＴ、夜はＩＩで通常営業する」

「「はい」」

「碇屋は、引き続き俺が運営する。但し、碇屋のエージェント部門は…」

と言って、ＳＫはそこに居る面々を見回して、その内の１人を指差し、

「ＨＹ…お前が指揮をとれ！」

「！」

ＨＹはＳＫの言葉にビクッとして硬直した。

「奴は言ってたぞ、『俺が万が一の場合はＨＹに指揮を任せる』と…もちろん、ＨＹお前一

人じゃない、他の娘ども（ＩＹ達の事）と連携し、それを取りまとめろ…と、それからＴＹ、ＩＹ、ＭＰとＡＭは現場実行部隊…お前（ＨＹ）はそいつらのサポートに徹しろ…とも」

ＨＹはたじろいだ。

「大丈夫よ、ＨＹ…私もできる限りサポートするわ」

ＨＹの隣に居るＴＴが優しく言った。

「ありがとうＴＴ」

「要は、奴の容態がはっきりするまでだ…それで駄目なら、碇屋のエージェント部門は閉める。それが奴の意思だ！」

「…て、言う事は…万が一の場合は、私達…」

ＩＡが不安そうに言うと、

「白山亭の店員で食べていく事だな…もっとも、次のオーナーが誰になるのか知らんが」

とＳＫが言うと。

「そんな…冷たいですよぅ…軍曹」

と泣きそうな声でＩＡが言うと、

「そーですよ」

ＴＴがＩＡに同情する。

「碇屋の共同経営者として俺と奴とで決めた事だ…ここに居ない連中には明日、俺から説明する。その後のパート・アルバイトには、ＴＴ…お前さんから説明をしてくれ。あとは奴の回復を祈るより他はない」

「「はい」」

翌朝、出勤してきたパート・アルバイト達に対して、白山亭内でＳＫが話をした。その話に一同声を失う。

ＨＹが「社長が戻る場所を守りましょう！」と言うと、パート・アルバイト達は皆賛同した。それを聞いてＳＫは、「（ＨＧ…おめぇって奴は…大したもんだ！）」と感心した。

午前中、病院に居るＫＭからＨＹに連絡が来た。それによると、ＨＧは頚椎骨折、胸部圧迫骨折と大腿部骨折…頚椎骨折は追突の衝撃によるもの、胸部と大腿部は追突の衝撃で車が前後につぶされ押し出された座席とハンドルに挟まれたモノによるらしい…頚椎骨折の衝撃で軽い脳挫傷状態になり意識不明になったとの事。あと、乗っていた車が炎上する前に助け出されたが、若干足に火傷を負った。

ＨＧの両親がＩＣＵに入りＨＧの状態を見たそうである。

●事件発生！

Ｙ国際港コンテナ埠頭…

ＩＭとＣＥが主演するドラマの撮影が続いていた。

ＣＥは、ドラマのスタントシーンの一つの練習のため、スタントチームと練習していた。

今撮影しているシーンは、ＣＥが演じる女性白バイ警察官が犯人の乗ったトレーラーを追跡して、トレーラーが行く手を塞ぐパトカーの列を避けようとして急ハンドルを切って横転するトレーラーの下の空間を自ら白バイごと倒してすり抜けると言う場面…

ＣＥが所属している芸能事務所〇×エージェンシー社長のＭＫは、最近ＣＥのミスが多発していてスタントシーンの撮影が押しており、これ以上撮影スケジュールを後ろ倒しにするのは、予算的に無理と考え、このシーン以降はスタントマンを使用した撮影に切り替える様に監督に指示を出した。

スタントマンから今やアクション女優に出世したＣＥは「（折角掴んだ女優の座を手放してなるものですか！）」と、監督に対して「このシーンは絶対わたしがやります！」と訴え、

スタントチームが止めるのにも関わらず、スタントの練習を続けていた。監督は仕方なく、ＣＥのやりたいようにさせていたが、スタントチームは「スケジュールが遅れて予算が超過すれば、それだけ実入りが悪くなるから、ここは別のスタントマンで続けるべきだ」と監督に訴えていた。

ＣＥはそんな状況にした自身を顧みずに、スタントの練習を続けていた。

「それじゃ、カメラテスト行きます。〝シーン５０３〟は、犯人の乗ったトレーラーを追跡する白バイに乗った主人公。犯人の乗ったトレーラーは行く手に塞がるパトカーを避けるため、急ハンドルを切るまでです。その先は別ドリになりますので、白バイもトレーラーの運転手役の人も、そこで止まってください。トレーラーを倒すシーンはまだ先だから、くれぐれも、トレーラーは倒さない様に！」

撮影シーンをボードを使って説明する助監督。助監督の説明に複数の撮影スタッフと白バイに乗るＣＥとトレーラーを運転する犯人役のスタントマンが頷く。それからいくつか説明を求めると、

「では、お願いします。配置について下さい」

「「はい」」

撮影スタッフとトレーラーを運転するスタントマンとＣＥは、それぞれの配置についた。

『撮影班Ａ用意はいいです』

『撮影班Ｂ用意はいいです』

『撮影班Ｃ、ＯＫです』

『マルチカメラ撮影班用意はいいです』

『こちら、トレーラー、準備できました』

『こちらＣＥ…いいですよ』
『こちらドローン撮影班、ドローン飛ばします』
と助監督の持つトランシーバーに次々と連絡が入る。
「監督、準備ＯＫです」
「それじゃ、シーン５０３…よーい」
監督が言うと、スタッフがカチンコと呼ばれる撮影器具を監督が座る椅子の前で撮影しているメインカメラの前にかざす。
「皆さん、スタートしてください」
助監督がトランシーバーに言うと、トレーラーとそれを追うように配置されたＣＥが乗った白バイが走り始める。トレーラーと白バイの速度が予定の速度になり、撮影シーンの絵コンテの場所に差し掛かると、監督が
「アクション！」
と言って、スタッフが持つ撮影に使用するカチンコが鳴り、監督前のメインカメラの前から引かれる。

撮影は、絵コンテを見ているタイムキーパーの指示で進む。タイムキーパーが「ハイ！」と言うと、助監督が「トレーラー、ハンドル切って」と指示を出す。
トレーラーは予定通り曲がり始める。シーンは、トレーラーが後ろを走る白バイに対して、４５度向くまで…そこから先は、別に撮影するので、トレーラーはそこで停車し、白バイも停車する事になっていた。
メインカメラのモニター越しに覗いている監督。上空ではトレーラーの向きを見ながら、ドローン撮影チームが

「はい、４５度！」
と言うと
「カッーート！！」
と監督が叫んだ。
…次の瞬間、大きな音がした。
撮影をしているカメラには、停車したトレーラーに向かって路面を流れる様に滑っていく転倒した白バイとＣＥの姿が写っていた。
白バイは、そのままトレーラーに追突して止まった。一方ＣＥは、その手前で止まり、動かなくなった。
「救護班！」
助監督が叫ぶと、撮影スタッフの後ろに停車しているトレーラーハウスから担架や医療品を持ったスタッフ達がＣＥの元に駆け寄る。その中には警護のＴＹが居た。

ＣＥは本来なら、大怪我か死亡事故になるところであったが、スタントマンだったＣＥの咄嗟の機転で軽症で済んでいた。担架でトレーラーハウスに救急車が来るまで、一旦運ばれて行くＣＥを見送ったＴＹは、転倒した白バイに駆け寄った。
「あーー、△□×万皇円かけて改造したバイクが――」
ＣＥの所属する芸能事務所〇×エージェンシー社長のＭＫが頭を抱えた。事務所の女優より、壊れたバイクの方に意識が行っていた。
ＴＹが、ＣＥが使用している白バイに似せたバイクを調べると油圧ブレーキのパイプにわずかに油が染み出している個所があり、よく見ると傷が見つかった。傷の位置からＴＹは
「(…これって…石とかが跳ねて出来た傷じゃないわね…巧妙に剃刀の様な鋭利な刃物でパイプに沿って、いくつも傷つけられてる…ここからブレーキオイルが徐々に染み出して

いって、本番中にブレーキが効かなくなったんだ！）」

ＴＹは自らオートバイを運転しているので、油圧ブレーキのパイプの損傷を見てそう直感した。その時、コンテナ埠頭に救急車が到着した。ＴＹは警護するＣＥの命が狙われている事に気づく…でも、その確信が無いため、これ以上考えがまとまらず、どうする事も出来なかった。

「ＴＹさーん、救急車に同乗して！」

とＣＥのマネージャーの呼ぶ声がして、「はい、今行きます」と返事をして、ＴＹはその場を離れざるを得なかった。

●ＨＹの「めんどくせーー」

母屋に居るＨＹのスマートフォンが着信音を鳴らす。

「はい」

『ＴＹです。今いいですか？』

「はい、お疲れ様。いいわよ」

『実は、ＣＥさんが撮影現場で事故を起こしまして…』

「えっ？…それでＣＥさんの容態は？」

『脳震盪を起こしていますが、軽症で済みました…今、救急車で港町総合病院に搬送中で私も救急車に乗っています。本来なら重傷で入院するか、下手すると死亡していたかも知れないほどの事故でした…が、彼女のスタントマンの経験で無意識に安全策を取ったようです』

「そうなの…ああ、良かった…こんな立て続けに…」

『立て続けって他にもあったのですか？』

「えっ！いっ、いや別に…で、撮影は？」

『とーぜん、ストップしています。あっ、それでですね、この事故について不審な点があり

まして…』

「不審な点…って、何？」

『彼女が乗ったバイクに細工がしてあるのが確認できました…これは事故ではなく、事件なのではないかと…』

「ちょっと、そっち行くわね」

『はい』

ＨＹはＴＹとの通話を切ると、大きなため息とともに、

「めんどくせー」

と絶叫して机に伏せた。これはＨＧの口癖〝めんどくせーー〟とは違い、ＨＹの頭の中には、ＨＧが意識不明で入院している最中に事件が発生し、事態収拾の方法が見つからなくてつい口に出た言葉である。机に伏したまま、ＨＹは

「准尉…いや、親父ならどう考える…わたしが考えないと…まずは冷静にならないと…」

事態を正確に把握して判断しようとする姿勢が、民兵会社時代の初陣の戦場でパニックになった（[巻き込まれ親父の逆襲] 参照）頃と比べて成長していた。

「そうだ！仮説に基づく情報収集と検収だ！親父は必ずやっていた…でも、わたし一人では…」

と言って、ＨＹはガバッと机から起き上がった。

人手…と言うより、ＨＧの代わりに指揮を執るには、ＨＹ一人では所詮無理と考え、ＨＧと一緒にいくつもの任務を共にしてきた仲間の知恵が必要…

ＨＹはＩＭの警護任務がとうに終わっているはずのＩＹを呼び戻すことにした。

ＨＹはスマートフォンでＩＹにかける

『はい』

「もしもし、ＩＹ？ＨＹだけど」

『何ですか？ＨＹ先輩』
「あなた、ＩＭさんの警護任務終わってるわよね？今どこに居るの？」
『はい…今は、Ｙ国際港に停泊しているフェリーの中でＩＭの撮影に付き合っています』
ＩＹはバツの悪い返事をした。
「だったら、すぐ戻ってきて！緊急事態だから！！」
『はい？』
「電話では話せないのよ…兎に角戻ってきて…お願い！」
『はい分かりました！』
ＩＹが慌てて戻ってくると、ＨＹはＨＧが事故で入院した話をした。
「何ですってー、なんで早く教えてくれなかったのですか！」
とＩＹは怒りのあまりにＨＹにつかみかかる。
「…わたしも言いたかったわよ！でも、任務中の貴女に言えなかったのよ！！」
とＨＹが泣いて振り絞るように言うと、ＩＹはハッとして
「…すみません、私が悪かったです」
「いいのよ…ＩＹ」
「…で、親父の容態は？」
「…まだ意識不明…今、ＫＭさんとＨＭさんが交代で病院に詰めているわ…」
「そうですか…」
と言って、ＩＹは肩を落とした。
「でね、あなたを呼び戻したのは、実はＴＹの所で事件が起こって、わたし一人では対処出来ないから、手伝って欲しいの」
と言って、ＨＹがＩＹの肩に手を乗せると、ＩＹは気を引き締め、
「そうだったんですね。ＩＭから事務所を通じて、ＣＥさんが事故で入院して彼女の撮影が

ストップしたと聞きましたが…事故ではなく、事件なのですね。親父がいなければ、私達娘が結束して対処しないと駄目ですね…分かりました。何なりと…姉さん」

「…頼りにしてるわよ、ＩＹ！」

「はい」

ＨＹはＴＹの所で発生した事件について説明した。

「わたし、これからＣＥさんが入院している病院に行って、ＴＹと話してくるわ」

と言って、ＨＹはＴＹの居る総合病院に向かった。

港町総合病院…

ＣＥは意識を取り戻し、既に一般病棟にいるとの事。病室には、ＣＥのマネージャーとＣＥの所属する芸能事務所○×エージェンシー社長のＭＫが居た。ＨＹの姿をみたＭＫは、

「ＨＹさん、わざわざどうも…ＨＧ社長は？」

と聞かれて、ＨＹはギクッとして

「あー、社長は、今帝都に…まずはこの度の事故に対するお見舞いを社長に成り代わり申し上げます」

と言って、誤魔化した。それを見たＴＹ…ＨＹの様子がおかしいのに気づいて

「ＨＹ先輩…チョット」

と言って、病室の外に目配せした。ＨＹは頷くとＴＹと共に病室を出て行った。

病棟の端にあるラウンジで

「ＨＹ先輩…どうかしましたか？」

と聞かれ、ＨＹはバツが悪そうに

「あなたのカンの鋭さには頭が下がるわ…実はね…」
ＨＹはＴＹにＨＧが事故で入院して意識不明の重体である旨を伝えた。それを聞いてＴＹは、
「…まさか、准尉が？嘘でしょ？」
顔面蒼白になるＴＹ
「…ゴメンね。今まで黙ってて…任務中のあなたに言えなかったの…ごめんなさい」
「…分かりました。教えてくれてありがとうございます」
と言って、項垂れるＴＹ…ＨＹはＴＹの背に手を添え、
「でね、あなたの所のトラブルを私達娘が親父の代わりに解決しないと…それでＩＹも呼び戻したし…」
と言うと、ＴＹが身を起こしてＨＹに向き直り、
「分かりました、姉さん。親父が入院している今、姉さん一人では親父の頭の何十分の一しか知恵が回らないですしね。私ら妹の分の知恵も足さないとですね…もっとも、全部足しても親父の足元には到底及ばないですが…」
とＴＹは持ち前の明るさで持ち直し、ＨＹに言った。
「あーー、言ったわね！そうよ、その通りよ」
とＨＹはＴＹの言葉に開き直って肯定した。
「それで、ＴＹ…その事故になったシーンって？」
「ＣＥさんが演じる女性白バイ警察官が犯人の乗ったトレーラーを追跡して、トレーラーが正面を塞ぐパトカーの列を避けようとして急ハンドルを切って横転するトレーラーの下の空間を自ら白バイごと倒してすり抜けるシーンのカメラテスト中です。撮影していたのは、横転するトレーラーの下の空間を自ら白バイごと倒してすり抜ける直前のシーンです」
「そのシーンはスタントマン？それともＣＥさん？」

「ＣＥさんです」
「…そう」
「ＣＥさんの話では、『ブレーキが利かないので、自らバイクを倒して、自分はバイクから離れて体を確保した』と言っていました。それでですね、事故直後に転倒したバイクを見たら、油圧ブレーキのパイプが細工されていました」
「…細工？」
「なにか剃刀か、鋭利な刃物で細工されて、パイプからブレーキオイルが漏れる様になっていました」
「写真は撮ったの？」
「…いえ、ＣＥさんが救急車で運ばれると言うので、そちらに気が取られて撮っていません…すみません」
「そう…任務はＣＥさんの警護だから、しかたがないわ…、わたしがコンテナ埠頭に行って、撮影に使われたバイクを見てくる…その細工されている場所教えて」
「はい…バイクのこのあたり…」
と言って、ＴＹはスマートフォンで表示されたバイクの絵に細工箇所を示して、ＨＹと画像共有した。

●情報収集

ＨＹは急いでコンテナ埠頭に行き、まだ警察による現場検証が始まる前に事故に遭った撮影用の白バイを現場スタッフに見せてもらい（碇屋エージェントは、ＩＭとＣＥの両方の警護を担っていたので、このドラマの撮影現場にはフリーパス状態。作者注）、ＴＹが言っていた油圧ブレーキパイプの損傷個所の写真をスマートフォンで撮影した。

それをＴＹに送り確認を得ると、ＨＹは事故現場を後にした。

母屋に戻り、タブレット端末に写真を転送して、ＨＹはＩＹにＴＹとの話を説明した。
「ＴＹ先輩の話では、撮影に使用するバイクは本番用ですよね？」
「そう…撮影に利用するバイクは特注品だから、一台だけなんだって」
「…私はこういう機械の事はよくわからないから、ＩＡを呼びましょう」
と言って、ＩＹはＩＡを白山亭店内から呼んだ
「なに？ＩＹ…今あたし店が忙しいんだから…」
「ゴメン…でも、今ＴＹ先輩の所で事件が起こっているの…知ってる？」
「姐さんの所で？」
「うん、だから車両について詳しいあなたなら知っていると思って…」
ＩＹがＩＡにＴＹの調べた事を話す
「…うーーん、私には…」
と言って、考え込むＩＡ…しばらくして
「そうだ！軍曹に聞いたらどう？軍曹なら車両全般に強いから…」
とＩＡが言うと、ＩＹも思い出して、
「あっ！忘れてた…」
と言った。そして、バツが悪そうにＩＡを見ると、ＨＹが
「ありがとうＩＡ、店に戻っていいわよ」
「すみません役に立てなくて、ＨＹ先輩」
と言って、店に戻るＩＡを見て、ＨＹは
「ＩＹ、軍曹を呼んできて」
「はい」
ＩＹに連れられて、ＳＫが母屋に来た。

「なんだ、お呼びか？」
「すみません、軍曹…実は…」
ＩＹがＳＫにまた説明する。
「…成程、ＨＹの写真からすると…これは実に巧妙に細工されてるな…一見、ブレーキの油圧パイプが劣化して、縦にひび割れの亀裂が生じて破損した様に見えるが…ここ（タブレット端末の画面を拡大して）にあるいくつもの亀裂は明らかに自然にできたモノじゃねぇ…多分剃刀みたいな薄くて鋭利な刃物で油圧パイプに沿って複数つけられた傷だ。この場合、２つの現象が考えられる。１つ目は、ブレーキを強く握る事により、油圧パイプが中のオイルの圧力に負けて破裂する場合…ま、人で言うと動脈硬化で急に血圧が上がると血管が破裂するパターンだ…でも、この写真では破裂した感じではない」
ＳＫの説明を頭に入れようと必死になって聞いているＨＹ達。
「もう一つは、ブレーキを効かせる度にここから徐々にブレーキオイルだけがパイプの外に染み出して抜けて行き、油圧パイプの中のオイルの圧力と外からパイプに掛かる空気圧の力が逆転すると傷から空気がブレーキパイプに入り込んでいきなりブレーキが効かなくなる…これも、人で言うと動脈硬化で血管に亀裂が生じて血管から血液が血圧で徐々に染み出している状態…この写真ではこっちに近いかな。ま、もっとも人の血管は体内にあるから血管から血液が漏れて周囲の細胞に影響を及ぼすけど…油圧パイプは外にあるから大気圧の影響でパイプ内の油圧と大気圧が逆転した時点でパイプ内に空気が入り込む。問題なのはすぐにブレーキの油圧パイプに空気が入らないところだ…普通は油圧パイプに傷や穴が開いて油が抜けて空気が混入すると、空気がクッションになって油圧自体がうまく伝わらなくなり、ブレーキの効きが悪くなる。そして、油圧パイプ内のオイルが抜け続け、中の空気の量が多くなると完全にブレーキが効かなくなる…今のバイクでは油圧系統のセンサーに探知されてブレーキの油圧警告灯なんかが点灯して故障に気づくが、この程度の傷だ

と、漏れてもバイクの油圧系統のセンサーに探知されづらいか、もしくはセンサーが使えない様に工作されている可能性が考えられる」

「…どの位ブレーキを使ったら、効かなくなりますか？」

「うーーん、この写真だけじゃ分からんな…せめてバイクの型式とブレーキ自体の使い方が分かればある程度予想ができるが…そもそも、この仕掛けをした犯人がブレーキパイプを一気に破裂させようとしたのか、そうではなく、ブレーキオイルを徐々に漏れるように巧妙に細工したかの意図が分からん」

「なぜですか？」

「こういうブレーキ装置には、安全のために油圧パイプに流れているオイルを余計に貯めとくための予備タンクがあるんだ…この予備タンクは、パイプの中の空気を抜く役割もしている。その予備タンクにどれくらいブレーキオイルが入っているかまたは入るかを知らないと…あと、撮影中の事故だって言ってたよな！それなら転倒時前後の映像があるはずだ…なんとか入手できないか？」

「わかりました、至急調べます」

「分かったら教えてくれ」

「はい」

●親父の「めんどくせーー」

ＳＫが帰った後、ＩＹが

「ＨＹ姉さん」

「なに？」

「情報収集って、大変ですね…どこまで集めないといけないか、またどの情報が必要か…」

「そうね…」

「親父は、それを的確にやってのけているのですね。少ない情報で的確な判断ができたんですよね」

「そうね…でも、親父だって、最初から正しい情報を得ていた訳じゃないし、何度も仮説を立てて行動して、別の情報に触れると、また新たな仮説を立て直していたわ」

「そうなんですか？」

「うん…Ｆ県領地の事件（[巻き込まれ親父の撤退]［巻き込まれ親父の反撃］参照）の事、覚えてる？」

「はい、あの時、私の〝死にたがり願望〟を解消してくれたのと、親父の作戦指揮を間近に見て、私はもっと教えて欲しいと思いました」

「あの時ね、事件当初の親父はＦ県領地で地図を片手にあっちこっち行って調べていたわ。私は親父と再び巡り合ったのは、親父が市街地で爆発現場と市街地の様子を調べている時だったの…丁度私がＳ県領地の実家に居るのが嫌になって、Ｆ県領地のショッピングモールに行ったときにね…」

と言って、ＨＹは瞑目して話を続ける。

「最初、親父は大臣と大使を狙ったテロと仮説を立てて、テロリストが居そうな場所と爆破現場を見て回ったそうよ…でも爆発現場の様子を見て何が爆破対象か分からなかったらしいわ…その時点では親父はある程度仮説を立てていたんだけど、その後の幹線道路を始め裏街道まで閉鎖されているのを見て、なにかもっと大きな事があると感じたらしいの…で途中のドライブインで、今まで集めた情報を基にわたしやＴＴを交えて例の親父モードの話し合いしたんだけど、まとまらなくてね、市街地は危険だからと山中の温泉に宿泊して、地図を眺めながらまた親父モードの話し合い…そこである仮説が立てられて、それがＭＯＸ燃料の奪取」

「そんなことがあったのですね」

「そこから、親父は自分の仮説を修正して、その仮説が正しいかに対する新たな情報をえるために移動している最中に、ＩＦ隊長とＹＭ支部長に出くわした…親父は最初ＩＦ隊長達に関わりたくなかったみたいだけど、ＩＦ隊長達の境遇を聞いて、親父の〝めんどくせーー〟が出て皆を無事助けるために一旦Ｏ県領地に逃げる作戦を考えたわ」

「あのーＨＹ姉さん」

ＩＹはＨＹに恐る恐る訊ねた。

「なに？」

「親父の〝めんどくせーー〟を私も聞いたことありますが、あれ何ですか？それから〝しちめんどくせーー〟と言うのも…」

首を傾げて言うＩＹに、ＨＹは頷いて

「あの親父の〝めんどくせーー〟というのはね、親父の中では大抵現在の問題について解決策が用意されているのよ。また親父が〝しちめんどくせーー〟と言うと、その目の前の問題が既に解決しているのよ…まぁ、親父本人が解決まで見据えたものの、それを実行するのが面倒臭いと思って言っているのよ」

「そーなんですか？」

とＩＹが応じた。

「だって、わたし会社の部隊長の初陣の戦場で、パニックになって、当時近くで別の作戦している親父に泣き言言ったら、〝しちめんどくせーー〟と言われて、死にかけたわ…」

「えっ？」

ＨＹの話にＩＹは驚いた。

「もっとも、親父の〝しちめんどくせーー〟がなかったら、わたしは部隊毎全滅して、ここに居ないけど」

と言って、ＨＹは目をつぶって手を合わせた。

「そーだったんですね」
「だから、あなたがＩＦ隊長に合流した後、親父は日和見保身内密主義の上層部の事など一切無視して、Ｏ県領地に逃げる作戦を開始しようとしたけど、一旦思い留まって、次のステップについてまた仮説を立てて、ＹＭ支部長を連れて市街地や北の海岸、更に核施設へと偵察に行って、ＹＭ支部長の話から、自分…いえ、わたし達の立てた仮説について確証を得た上でＯ県領地に逃げたのよ」
「…」
「だからね、親父があれだけ大きな作戦がたてる事ができたのは、まず現場を検証して仮説立て、それが新しい情報を得て間違っていたら、何度も検証してから仮説を立て直して、都度見直して検証するのを繰り返し…そうしてある程度の確証が得られたところで、事件は解決するの！親父はそれを過去に多くやっていたから、情報収集についても何が必要かをある程度のカンで必要最低限を集める事ができるの」
「と、言う事は…」
「そう！ＣＥさんの事件が何を元に起こったかの仮説を立てるための今は検証の状態！その為の情報収集。それも、キチンとした情報が揃うまで何度も…それに加えてわたし達はその情報が正確に分析できる人物を巻き込んで依頼すること」
「…だから、軍曹…」
「そーよ」

●時間差
ＨＹはＩＹを連れて再度コンテナ埠頭に行くが、既に警察が現場検証を始めていた。事故現場には規制線が貼られ、現場に立ち入る事ができなかった。
「「(しまった、遅かった！)」」と思い、規制線の前で立ちすくむＨＹとＩＹ…そこに、

「あら、ＨＹさんとＩＹさん…」
規制線の前にいる女性警察官が二人に話しかけてきた。
「…あなたは？…あっ」
と言って、ＩＹが見ると港町水上警察署（事故現場のコンテナ埠頭は、港町水上警察署の管轄です）の女性警察で、休日は白山亭でアルバイをしている一人であった。ＩＹ達が見慣れた白山亭の女給服姿ではなく女性警察官の制服を着ていたので、分からなかった。
「あはっ…この格好では分かりづらいですよね。港町水上警察署交通課のＭＳよ」
と言って女性警察官ＭＳは被っている帽子を上げた。ＩＹは
「現場で事故を起こしたＣＥの所属する芸能事務所○×エージェンシーの社長さん、中に居ますか？」
「その人なら、病院から戻ってきていまあそこの中で話を聞かれているわ」
と言ってＭＳは、一台のワンボックス車タイプの警察車両を指した。
「用事なの？ＣＥさんの件？それともＩＭさんの件？」
「ええ」
ＩＹは警戒して、口を濁した。
「…終わったら呼んでこようか…内緒で」
と女性警察官は小声で言った。
「お願いできますか？」
とＩＹが言うと、ＭＳは頷いた。
「ところで、事故車両はどこにあるのですか？」
とＩＹが訊ねると、
「あそこのブルーシートの中…でももうじき署に運ばれるけど…なにか？」
「…どちらかと言うと、事故車両の方に用があって…」

「なにかあるの？」

「…」

ＩＹはまだ警戒していた。ＭＳは真顔で

「なにかあったのね…私に協力できる事があれば協力するわ…大丈夫よ、あなたたちの仕事にクライアントとの守秘義務契約がある事自体知ってるわよ。店（白山亭）内でよく社長達がクライアントと話をしているのが聞こえてきたりするけど、こっちも店を出たら忘れて黙っているのよ。店内ではアルバイトも仕事中は碇屋のエージェント気取りでいようと、アルバイト仲間の間で暗黙のルールがあるのよ」

と言って、笑った。それを聞いて、ＩＹは決心してＨＹを見ると、ＨＹも黙って頷いた

「…なんか細工されている様でして」

「えっ！」

と言って、声を上げそうになったが、慌てて自ら口を塞いだ。

「なになに？事故じゃなくて事件？」

「まだ確証がないのですが…ウチのＴＹ（外部の人なので〝先輩〟を付けない）が事故車両を見て細工してあるのを見つけまして…」

と言って、ＩＹは自分のスマートフォンでＨＹが撮影した写真をこっそり見せる。

「なに…これ…ホントに？」

と言ってＭＳは、何かを思いつき、

「だったら、署に先に行って、向こうの鑑識科の仲間のＡＫに連絡しておくから…大丈夫よ、彼女もお店でアルバイトしてる仲間だから」

「ありがとうございます。私は港町水上警察署に行きます。姉さんはＭＫ社長と…」

「ええ…」

ＩＹとＨＹは二手に分かれた。

●ＨＹの調査

ＨＹはＭＳの手引きでＭＫ社長と規制線を挟んで合う事ができた。

「ＭＫ社長」

「わたしに用ってなに？ひょっとしてＩＹちゃんの事？」

ＭＫ社長は、以前ＨＧがＩＹについてＩＭの警護任務を完了しても、ＩＭがまだＩＹを返さなくて一緒に居る事について話をしていたので、ＨＹがその事を言っていると思っていた。

「いえ、ＩＹは返してもらいました…ただ、そのぅ…ちょっと強引な事しましたので…あはは」

とＨＹが苦笑いすると、

「わかったわ、ＩＭにはわたしから話をしとくわ」

と言って、ＭＫが立ち去ろうとしたので、ＨＹが慌てて

「あとですね、ＣＥさんの事で…」

「なに？ＣＥ？」

ＭＫは驚いて振り向く

「はい、実はウチのＴＹからＣＥさんが撮影に使用したバイクに何か細工がしてあったと報告を受けたもので…」

「細工？バイクに？」

「はい…」

と言って、ＨＹはスマートフォンで撮影した事故車両の写真を見せた

「これは、１時間程前にわたしがＴＹの報告を受けてから、スタッフにお願いしてそこの事故車両を撮影したものです」

「？？」

「社内で検証した結果、ブレーキの油圧パイプに人的な細工がされていて、徐々にブレーキオイルが漏れ出す様になっていると、車両に詳しい人が言っていました」

「そーなの？」

「なので、このＣＥさんの事は事故ではなく、事件だと我々は認識しています。何かＣＥさんについてご存じの事があれば教えていただきませんでしょうか？」

「うーーん、そうねぇ…」

ＭＫは何か知っている様だったが、口ごもった…事故が事件になって、マスコミやライバル会社に突き上げられるのを恐れているのではないかとＨＹは思った。

「お願いします！ＣＥさんの命にかかわる事です」

ＨＹは得意の上目づかいでＭＫを見る。それを見たＭＫはＨＹに根負けして、

「…はいはい、わかりました」

と言って、ＭＫはＣＥとスタントチームとの確執について知っている事を話し出した…ＣＥはスタントマン上がりの女優であるため、日頃からのスタントチームに恨まれていた。特にＤＲは同じ女性としてＣＥに対しての嫉妬が強くて、日頃から『ＣＥが女優になれて、わたしがなれないのは何で？わたしの方がスタントの腕もいいし、バイクも乗りこなせるし…』と、ＣＥに対抗意識をむき出しにしていたと話をした。

ＨＹはそれを聞いて、ＳＫの指示をＭＫ社長に訊ねてみた。

「それからですね…もう一つお願いがあるのですが…」

「なんでしょう」

「ＣＥさんの事故は撮影中と聞いております。事故当時の映像を見せていただけませんでしょうか…」

ＨＹは恐る恐るまた得意の上目遣いをした。それを見たＭＫは

「…うーん、見せてあげたいけど…」
と言って頭を掻いた。それを見てＨＹはＭＫがこちらに見せられない理由があると直感した。
「なにか、わたし達が見られない理由があるみたいですね」
「そーなの…実は警察に証拠として提出しちゃって…」
「…ああ成程、そういう事ですか…（しまった！）」
「ごめんなさいね。警察から映像が戻って来たら、見せてあげるわ」
「ありがとございます」
ＨＹは規制線の向こうに歩いて行くＭＫを見送って、「（警察なら、ＭＳさんとかＩＹに頼むしかないわね）」と考え、ＩＹに「事故映像は証拠として警察に提出した。そちらで借りられないか聞いて欲しい」とメールした。
ＭＫが立ち去った後、それとなくＨＹに近寄ってきたＭＳに
「どうでした？」
訊ねられ、事故映像は警察に提出した事を話すと、
「それは、私の出番ね。何を調べればいい？」
「出来れば事故発生時のＣＥさんの反応…ブレーキが効かなくなってどうしたのか詳しく知りたいのと、路面の状態とか…本当は、わたし達が見られるといいんだけど」
「…それはチョット…もし事件なら、大事な証拠になるので、問題の映像は裁判が終わっても持ち主には戻らないですね…逆にコピーとかバックアップとかないかしら、今の映像って、昔のフィルムと違ってデジタルカメラで撮影するでしょ？データになっていますよね」
それを聞いて、ＨＹは「（エッ？ＭＫ社長は、多分撮影スタッフが事故映像のバックアップを持っている事を知らない？…それとも知っていて隠してる？…いずれにせよ、ＭＫ社長から事故映像は入手できないわね）」と考え、

「あなたが映像データをコピーしてくれるとありがたい…かなぁ？」
とＨＹはＭＳに上目ずかいで訊いた。
「ごめんなさい…それをやったら、捜査情報の不当漏洩で私が懲戒解雇されちゃうの！」
ＭＳは困った顔をして言うと、ＨＹは「(そうよね…そこまでして貰ったら、ＭＳさんが大変な事になるわね)」と考え、
「アハハ！そーよねぇー…冗談だから忘れてね」
とＭＳに言って、「(あーーー、駆け引きの順番間違えたー！どーしよう！！先に映像データの入手をしてから、ＣＥさんのバイクの細工についてＭＫ社長に話をするべきだったー)」と落ち込んだ。

●ＩＹの調査

ＩＹは、港町水上警察署に行って、コンテナ埠頭に居る仲間のＭＳから連絡を受けていた鑑識課の女性警察官ＡＫと会う事ができた。
「ＭＳから聞いてますよ、ＩＹさん、ＣＥさんの撮影に使用したバイクに細工がされているんですってね」
「そうなんです」
と言って、ＩＹはＨＹがスマートフォンで撮影した写真を見せた。それを見たＡＫは、
「この付近ね…確認しておくわ」

やがてＣＥが乗って事故を起こした撮影用バイクが運ばれてきた。ＩＹはＡＫと搬入作業を見ていた。
鑑識作業が始まると、さすがに部外者のＩＹは立ち入れないので、港町水上警察署の受付の椅子に座って待っていた。

やがて、ＡＫがＩＹの所に来た。
「どうですか？」
「うーん、見たけど…」
「？」
「油圧パイプに細工された形跡が見つからないの…」
「えっ？そんなバカな！！」
「あーー、安心して。油圧パイプに細工された形跡は見つからなかったけど、油圧パイプ自体が、あなたが見せてくれた写真と違う物になっていたので、あの写真が正しければ、多分事故現場で交換されたと思う」
「なぜ？」
「それを調べるのは、私達の仕事よ！任せて、わかったら連絡するから…ＩＹさんもなにか掴んだら私に教えてね」
「…あと、油圧系統のセンサー類に細工がされているのでないかと話を聞きました」
「そう…それは、見ただけでは分からないから、時間がかかるわね。注意して見るわ」
「はい、でもくれぐれも…」
「分かってるわよ、署には内緒ね」
「ありがとうございます。それから、バイクのメーカーと排気量と型式って言うのですか？教えてくれますか？」
「それなら今分かるわよ、Ｋ社のバイクで排気量は４００ＣＣ、型式はＣ○○の××年式」
「ありがとうございます…それから、あと…」
「なに？」
「ウチのＨＹから、ＣＥさんの所属する芸能事務所○×エージェンシーの社長ＭＫからそちらに証拠として提出した事故映像の画像を借りることが出来ないか聞かれていて…」

「ごめんなさいね…それやったら、私がクビになるの…」
とＡＫはＩＹに手を合わせて言った。

白山亭…
ＩＹは男屋に行き、ＳＫにバイクのメーカーと排気量と型式について話すと
「…なんだ？４００ＣＣかよ！白バイは基本７５０ＣＣ以上なんだけど…ＣＥは中型免許しか持ってないのか？よくそれで、バイクスタントのアクション女優気取れるな。まぁそれだけ分かったら、ある程度予想できるから、こっちで解析する」
とＳＫは毒舌で言い放った。ＩＹは「（そういうモノなんだ…）」と思い、
「ありがとうございます。ＣＥの運転免許については、こちらで調べます。あと事故の画像は警察に提出したので見ることが出来ないと言われました」
と言った。それを聞いて、ＳＫは
「撮影スタッフが映像データのバックアップ持ってんじゃねぇのか？…昔のフィルムじゃあるまいし！」
と言ったところで、ＳＫはハタと思い直し、
「…でも、それをこちらが入手したら、あの事故が殺人未遂事件になって、検察に映像が証拠物件として渡ると、それを持っているこっちがヤバいことになりそうだから、その映像入手は諦めよう…仕方あんめぇ…」
と言った。
ＩＹは「（ＣＥさんの免許については…本人に直接聞くのが一番いいけど…軍曹があんなに言うくらいだから、直接聞いても多分教えてくれないかな…それなら…）」と考え、ＩＹはＴＹと港町水上警察署交通課のＭＳに聞いてみることにした。
ＴＹからの返事は『警護中にお互いライダーだから、バイクツーリング話をして話の流れ

から普段乗っているバイクについて話をするし、マンションに止めているバイクを見せてもらった事あるけど、本人は４００ＣＣのバイクを運転しているわよ。けど運転免許証は見たことが無いわね。聞き出してみる』と返ってきた。

一方、ＭＳからの返事は『運転免許証にはバイクは中型』との事。

暫くしてＴＹの報告も『ＣＥさんから免許見せてもらった…中型』。

それを母屋に居るＨＹに話したら、ＨＹは

「軍曹（ＳＫ）の言う通りね…ＣＥさんバイクの免許が中型でバイクアクションやっているからそれを隠しているのね…多分、事故映像の画像も…それが外部にバレたら、週刊誌とかライバル芸能事務所に叩かれて大変な事になるでしょうし、限定解除なら、親父が持っている〝特別銃器携帯・使用許可証（ＨＧは限定解除を持ってます）〟みたいにそれとなく自慢するもの…」

「あっ、そうですね…親父は特別銃器携帯・使用許可証の〝限定解除〟をよく見せてくれましたね（見せびらかしたとは言わない。作者注）」

と言ってＩＹは納得した。

「それからね、事故映像はわたしもＭＳさんに当たってみたけど、流石にＭＳさんを犠牲にしてまでは…これは、わたしの完全な初動ミスだったわ…事故現場でＭＫ社長と話をしている時に、先に映像データの入手をしてから、ＣＥさんのバイクの細工についてＭＫ社長に話をするべきだった…駆け引きの順番間違えたわ…ごめんなさいね」

と言って、ＨＹは項垂れる。

「本当に情報収集って、大変ですね…」

ＩＹもしみじみ言うと、

「…軍曹の言う通り、諦めましょう…」

「はい…」

●ＭＰ戻る

夕方、ＨＹのスマートフォンの着信音が鳴る。相手はＭＰ

「はい」

『Ｄ国大使館での用事済んだネ、これから帰るネ』

「はい、気を付けてね」

『ハイネ』

ＭＰが母屋に戻ってきた。

「ＭＰお帰りー」

「タダイマデス」

「Ｄ国大使館行ってたのね」

「ハイネ、Ｄ国エージェント機関ＤＳＦの新しい防弾インナーについての話についてシャチョーの代理で行っていたネ」

「どうだったの？」

「インナー蒸れる…これ向こう（Ｄ国）でも問題だったネ。特に、オンナ用した…」

と言って、ＭＰは自分の下半身を指した。

「あら…そう…」と言って、ＨＹは「（女性の悩みは、洋の東西同じなのね）」と思った。

「で…あっちのメーカーに改良させるって言ってたネ」

「それは良かったわ、ところで、ＭＺさんとは？」

「…あんな奴シラン！」

と言って、ＭＰはソッポを向いた。ＨＹは「（また、ＭＺさんと喧嘩したのね）」と思った。

「そういえば、シャチョーどした?出かけてるカ?電話しても通じないネ…」
「あのね…ＭＰ」
ＨＹが深刻そうな顔をしたので、ＭＰは驚き
「シャチョーなにかあったカ！」
「…うん、実は昨晩、車で事故を起こして…」
「ナント！」
「今、意識不明で、帝都の病院に入院してるわ…」
「エエッ！」
ＭＰは顔を紅潮させた
「シャチョーの居る病院ドコ？」
今にもそのまま走ってＨＧの入院している帝都内の病院に行きそうな勢いだったので、
ＨＹはＭＰに抱きつき、そのまま引きずられながら
「ちょ、ちょっと落ち着いて…ＭＰ！」
とＨＹが慌てて言うと、ＭＰはハッとして
「ゴメンナサイ、ワタシ取り乱したネ」
と言って、抱き着いているＨＹを優しく抱きしめ、頭を撫でる…（この光景…どこかで見た
ような…(笑)作者）
「ＭＰ…」
「ハイネ」
「あのね、准尉が入院した事。内緒にしてくれる?特にＤ国エージェント機関ＤＳＦには…」
ＨＹ言葉を聞いて、ＭＰは
「分かったネ…シャチョー入院したと知ったら、あいつら何するか分からないネ」
「ありがと…それから、わたしの頭を撫でるのやめてくれる?」

「なんで？ＨＹの頭、ワタシにとって、丁度いい位置」
「…（怒）」
ＨＹはＭＰが自分の頭を撫でている手を振りほどき、
「あとね、ＴＹが警護任務に就いているＣＥさんね…撮影中に事故起こしたの」
「ナント！で、ＣＥさんどした？」
「スタントマンから女優になった人だから、幸い軽症で済んでいるわ」
「そーなの？よかったネ」
「でもね、ＣＥさんの乗った撮影用のバイクのブレーキに細工がしてあって…どうやらＣＥさんを事故に見せかけようとしたらしいの」
「ナント！」
「でね、親父が居ない今、私達娘と息子達が協力して事件を解決しようとしているの、だからあんたも協力してね」
「ハイネ！ＨＹネーちゃん」

●ＡＭ戻る
夜、ＨＹのスマートフォンの着信音が鳴る。相手はＡＭ
「はい、どうしたの？」
『いや、ＯＴ殿下の警護任務が終わったんですけど、准尉のスマートフォンにいくら連絡しても出ないので…』
それを聞いてＨＹは「（あっ！准尉のスマホ…今どこにあるのかしら…病院？警察？それとも愛車と運命を共にした？…）」と慌てた。
『ＨＹ先輩、どうしましたか？』
ＡＭの問いかけに、ＨＹは我に返り、

「あっ…いや、ゴメン…今どこ?迎えに行くわ」
『今、帝都の皇王省の正門前です。迎えに来ていただけるのなら、正門の向かいの通りに喫茶店があるので、そこで待ちますけど』
「分かったわ、そこで待っててね」
『はい』
ＨＹはスマートフォンの通話を切ると「ふぅ…」と言って深いため息をついた。それを見たＩＹは
「姉さん疲れているのでは?ＡＭ先輩の迎えは私が行きます」
と言うと、ＨＹは首を横に振って
「そうね…いや、やっぱりわたしが行くわ。親父が入院した話をしないといけないから…ＭＰみたいに暴れはしないでしょうけど…(笑)、こういう時は年上が言った方がいいのよ」
「はい…気を付けて…姉さんまで親父の様になったら、困ります」
「ハッキリ言うのね!帰りはＡＭに運転させるわ。留守を頼むわね」
「ハハ、行ってらっしゃい」
ＩＹは手を振った。

帝都の皇王省の正門前…
ＨＹは片側３車線の幹線道路を挟んだ反対側にある喫茶店の前に車を停車させた。
「ＨＹ先輩!」
「喫茶店のオープン席に座っていたＡＭが手を上げる」
「待たせてごめんね!乗って!!」
ここは、駐停車禁止なので、ＨＹは助手席の窓を開けて言った。ＡＭはカードレールを両手にコーヒーのテイクアウト容器を持ったまま、飛び越える。それを見たＨＹは「(凄い運

動能力ね…）」と感心した。ＡＭが助手席に乗り込むとＨＹはすぐに車を発進させた。
「ごめんね、待たせて」
「いや、別にいいですけど…はい、ＨＹ先輩」
と言って、ＡＭは持っているテイクアウトのコーヒーの容器を差し出す。
「ありがと、今は運転中だから、そこのドリンクトレーに置いてくれる？」
「はい」

暫く車を走らせて、信号待ちをしている時に、
「あのね…実はね親父…じゃなかった准尉が交通事故でね…」
「えっ？」
「意識不明で入院してて、今ＩＣＵに居るの…」
「またまたー、ＨＹ姐さん…冗談を…」
ＡＭはＨＹの話を自分をイジル為の触りととって言うと、
「ホントなのよ！！」
とＨＹが叫ぶように言うと、信号が変わり、後ろの車からクラクションを鳴らされる。慌てて車を急発進させるＨＹ…それを見てＡＭは
「姐さん、落ち着いて！」
「…ゴメン！」
ＨＹの態度から、ＨＧの入院の話は本当の事だと思い、
「分かりました。准尉は入院しているんですね」
ＡＭは車窓の窓の外を見ながら言った。
「そう…帰り道の途中に准尉が入院している病院があるの…でも、もう遅いから寄れないわね…」

「そうですね…」
ＡＭは力なく答える。ＨＹは「（ＡＭも親父の事心配してるのね…）」と感じた。
「あとね…悪い話が続くけど、ＴＹの所でＣＥさんが撮影中に事故で入院してね…それが事件の疑いがあるから、今私達で調べてんの」
「そーすか…自分も手伝いますよ」
と相変わらず気の抜けた返事をするので、
「当たり前でしょ！あなたもあの親父の息子になったんだから！！」
と、ＨＹは怒ってＡＭに且を入れるように言うと、ＡＭはＨＹの方に向いて、持ち前の調子の良さで、
「そうでした。なんなりと姉さん」
と言って、ＨＹとＡＭは車の中で笑った。

●事件検証
Ｙ国際港輸出入用車両モータープール（ＣＥのロケは、Ｙ国際港コンテナ埠頭です）…
「いくよ！ＩＡ！！」
「はいな、姐さん！」
ドラマの撮影スタッフから入手した絵コンテに基づき、ＣＥが事故を起こしたシーンの再現を行った。
ＨＹが操縦するドローンの映像から、トレーラーの向きを確認して
「はい、４５度！止めて下さい」
とＩＹが言うと、それを合図にＴＹがバイクのブレーキーを操作した。
バイクにはあらかじめ、ＨＹが撮影した写真と同じように、バイクの油圧パイプに傷をつけてある。このテストでどの位ブレーキ油が減っているかを調べた。そのために、わざわざ

撮影に使用したバイクと同型のバイクとトレーラーまでレンタルした。（バイクは港町商店街にあるバイクショップに事情を話して貸してもらった…ＴＹの伝手です。作者注）

結果、一度の撮影ではそんなにブレーキ油が減っていないことが分かった。

「変ねぇ…」

ＨＹは油の減った量についてＴＹから報告を受けると、男屋に居るＳＫに連絡した。

『どんぐらい減った？』

「ほんの少し…」

『そうじゃない！正確な値は…ＴＹに代われ！』

「ＴＹです。減った量は…ほんの×ＣＣ位です」

『そうか…予想通りだな…』

ＨＹのスマートフォンをハンズフリーモードにしてＴＹが話すと、ＳＫの言葉にＨＹは、理解が出来ず戸惑った。

「…どういうことですか？」

とＨＹがＳＫに訊ねると、

『一度や二度のプレーで、ブレーキオイルが抜けたら、路面にオイルが残って故障として修理されるだろ』

「はい、そうですね」

ＨＹにはなんだか分からなかったが、返事をした。

『本番が始まるまで、何度かリハーサルとかで試走したろ』

ＴＹは、事故当時の事を思い出しながら、

「…はい、そういえば…」

『直前まで誰が転がして（運転して）いた？』

「えーーと、確かスタントチームの人…ＤＲさん。（ＣＥと）同じ女性で年恰好も近い人で

した」
『そいつが犯人とは断定できないが、ＨＹの話だとかなりＣＥに対する嫉妬や対抗意識があるそうじゃないか』
「はい」
『そのＤＲって奴には、注意した方がいいと俺はおもうぞ…じゃ、実験続けてくれ』
「はい」
ＳＫとの通話が終わると、
「姉さん、スタントチームには誰か行かせてます？」
ＩＹがＨＹに訊ねる。
「ＡＭに事務所を張らせているわ…あの子Ａ国で探偵のアシスタントしていたから」
「ＭＰは？」
「コンテナ埠頭に行ってもらってる。事故現場で何か見つけられないかと」
「そうですね…取り換えられた油圧パイプが見つかれば、一番嬉しいんですけど…」
ＩＡが言うと、ＨＹとＩＹは呆れて、
「「なにを能天気に」」
ＩＡがシュンとしていると、ＨＹのスマートフォンの着信音がなる。
「はい」
『ＡＭです』
「ご苦労様」
『いま、スタントチームの事務所からバイクが出て行きました』
「乗っている人、判る？」
『女性としか…事務所から出てきた時にはヘルメット被ってたんで…追跡しますか？』
ＡＭの言葉に、ＨＹはバイクで出て行ったのはＤＲと直感し、ＡＭに追跡を指示しようか

と思ったが、果たしてＤＲの単独犯行なのか自信がなかったので、ＤＲが何か持って帰ってきたら、ＡＭに調べさせようと考え、

「うーーん、ありがとう、でもそのまま見張ってて。戻ってきたら、連絡頂戴」

『はい』

ＡＭとのやり取りを聞いていた、ＩＹ、

「スタントチームの事務所…確か警察の捜索が入ったんですよね」

「そうね…ＭＳさんの話では事故車両の点検記録とか運行記録の押収…また撮影用に市販のバイクを白バイに仕立てたバイクカスタムの会社も同じく立入りがあったそうよ」

「なにか見つかったって？」

「ＭＳさんの話だと、ＡＫさんがそれとなくブレーキ周りの部品の廃棄在庫に注意する様に捜査官に耳打ちしたそうよ…」

「だれです？」

「それがね…あなたが良く知ってる人！」

「ゲッ！まさかＫＪ（皆さん忘れているようですけど、彼は港町水上警察署の捜査官です(笑)作者）？」

「ピンポーン！…彼張り切って行ったけど、そんなもの見つからなかったって」

ＨＹが笑いながら言うと、

「…良かった…」

とＩＹが安堵の表情をした。

「あら、彼が見つけてくれた方がお互い良かったのに…」

「あれ（ＫＪ）には死んでも借りは作りたくありません！」

「可哀想…ＫＪ君…」

「だったら、姉さんにあげますけど？」

ＩＹがＨＹに厭味ったらしく言うと、

「あら…ヤダー、こんなオバチャンに…それにわたしには親父がいるから…」

「(ここで、『オバチャン』言うんだ…えっ？親父って…なんだってー！)」とＩＹはＨＹに突っ込みと嫉妬を同時にした。

●チェイス

コンテナ埠頭で事故現場を見ているＭＰ…現場には警察が事故検証したチョークの跡がまだ残っていた。

バイクのスタート位置から転倒箇所に向かって歩き出す。

「軍曹（ＳＫ）の話…『バイク走った跡を撮影してきてくれ』だけど…タイヤ跡はあるけど油の漏れた跡ないネ…」

ＭＰはスマートフォンのカメラを録画にして歩く。

「バイクのブレーキの跡はないネ…」

転倒箇所に警察が事故検証時に残したチョーク跡も含めて撮影していた。

その時、コンテナ埠頭の入り口からバイクのエンジン音が聞こえたので、ＭＰは急いでコンテナの陰に隠れた。

ＭＰはスマートフォンでＨＹに電話をする。

『はい』

「ＨＹネーちゃん…事故現場にダレカきた」

『なんですって？誰？カメラにできる？』

「分かったネ」

と言って、ＭＰはスマートフォンを近づいて来るバイクに向けカメラをテレビ会議モード

にした。
ＭＰが居るにも関わらず、バイクは事故現場に近いコンテナの側にバイクを止めた。
ＨＹ達は、ＭＰのスマートフォンから送られてくる画像を見ていた。
バイクを降りたライダーはヘルメットを脱いだ。それをＭＰのスマートフォン越しに見たＨＹ達…その中のＴＹが
「ちょっと、ＭＰズームして！」
と言った。
『ハイネ』
ＭＰがスマートフォンのカメラをズームする。するとＴＹが
「ＤＲさんだ！」
「えっ？ＴＹそれ本当？」
「はい姉さん、間違いありません」
ＴＹの返事に、ＨＹはふとＩＡが『そうですね…取り換えられた油圧パイプが見つかれば、一番嬉しいんですけど…』と言ったことを思い出し、
「ちょっとＭＰ、聞いて」
ＨＹがＭＰに呼びかける
『ハイネ』
「あの人が、何か拾ったら、迷わずそれを奪うのよ！」
『ハイネ、オネーチャン！』
ＭＰはスマートフォンの通話を切ると、まるでアメリカンフットボールのクォーターバックの選手がする姿勢をして構えた。

ＤＲがバイクを止めた側のコンテナの下をライト片手に探っている。ＭＰは飛び出す機会を伺っていた。

ＤＲがコンテナ下から何か細いひも状の物を拾い上げたのを確認して

「ウオーーーッ」

と叫んで飛び出す。

ＤＲはまるで猛牛が向かって来る様なＭＰを見て驚くとヘルメットを被らずにバイクに飛び乗り走り出す。ＭＰは寸でのところでＤＲを逃がす。

「逃さないネ」

ＭＰはコンテナの陰に隠している自分のバイクに乗り、ＤＲの追跡をはじめた。

この時ＤＲのバイクの排気量は７５０ＣＣ、対するＭＰのバイクは１，５００ＣＣ排気量…この差だけと言う訳では無いが、ＤＲが蛇行したり、コンテナを回り込んでＭＰを巻こうとしたが、ＤＲの体重が軽くてバイクのコントロールが思い通りにいきづらいのに対して、ＭＰはそのガタイと馬鹿力で１，５００ＣＣの重量級バイクをねじ伏せるように操り、ＤＲとの距離を詰める。

その内、ＤＲがコーナーリング操作を誤って転倒すると、ＭＰはＤＲの倒れている所にバイクを止め。ＤＲの怪我の具合を確認した。ＤＲはスタンマンだけあり軽症で済んだ。

「なによ！あんたは？」

ＤＲはＭＰに怒鳴るが、ＤＲの怪我を気遣い、

「ダイジョブか？」

「フン！」

と心配するＭＰに対してソッポを向いた。

「手に持ってるモノ出すネ」

「なに？あんた警察？…それともマスコミに雇われたエージェント？」

Ｄ国人のＭＰを見たら、そう思うであろう（作者）
「ワタシ、碇屋のエージェントネ」
「えっ？…そ、それってＣＥのボディーガードの…」
「ワタシの同僚ネ」
「…分かったわよ！持っていきな」
ＤＲは観念して手に持った油圧パイプをＭＰに渡した。ＭＰはそれを受け取ると
「立てるあるカ？」
と言って、ＭＰはＤＲに手を差し出す。ＤＲはＭＰの手を取ると引き起こされた。
「警察に行くんだろ？」
「ソレ、ワタシの任務違うネ」
「？？」
「逃げられないから、自首するネ」
「…わかったよ…警察の前まで一緒に行ってよ」
「ハイネ」
ＤＲはＭＰに伴われ、港町水上警察署に自首した。

●ＨＧ意識が戻る
ＭＰから報告を受けたＨＹ。
「はい、ＭＰご苦労様…戻ってきて」
『ハイネ』
ＨＹはＡＭにも電話する。
「ＡＭ…事件は終わったわ…帰ってきて頂戴…ありがとうね」
『終わったんですね。すぐ戻ります』

ＨＹはＩＡに対して、
「あなたの言った通り…ＭＰからの報告では、現場に取り換えられた油圧パイプが隠されていたそうよ…あの時は、『なにを能天気に』って言ったけど、あなたの慧眼には、驚くばかりだわ…ごめんなさいね」
と言って、ＩＡに頭を避けると、ＩＹも
「私も同じく、ごめんなさいね」
と言って頭を下げた。それを見てＩＡは恐縮して
「いえいえ…あれは本当に軽くあたしの希望を言っただけですので…二人供頭を上げてください」

ＤＲは港町水上警察署に自首し、ＣＥに対しての個人的な恨みから犯行に及んだ旨を話した。しかし、取り調べが進むにつれ、ＤＲだけではなく、スタントチームがＤＲに同情して手を貸していたことが判明した。
また、ＭＰが持ち帰ったブレーキの油圧パイプには、ＨＹが撮影した傷がついていて、それを港町水上警察署に証拠物件として提出した。油圧パイプはＨＹが写真を撮影したのを知らずに、スタントチームが警察に押収される寸前で交換していた事が犯行に関わったスタントチームのメンバーの自白により判明した。
元々スタントチームは、シーン５０３の撮影で、ＣＥが乗ったバイクをトレーラーの手前に止めるためにバイクのブレーキをフルに掛けると考えていたが、ＣＥが撮影用の白バイを本番まで壊さない様にするために、トレーラーとＣＥのバイクとの間の距離がありすぎて、ＣＥがフルにブレーキをかけなかった。そのためブレーキパイプは破裂する事が無かった。逆にＤＲが本番前にＣＥの乗るバイクを試走してブレーキパイプの細工を何度も確認していた際に、ブレーキパイプからオイルが染み出して居る事を確認したまでは良かった

が、そのまま試走を続け、ブレーキパイプの中のオイルが抜けて、空気が入る直前でＣＥと交代し、ＣＥもアラームランプ等ロクにチェックしないままシーン５０３の撮影に挑んでしまったため、結果今回のような事故に至ったと言う事が、後日ＭＳとＡＫの話から判明した。またそれを撮影した映像を見たＡＫの話によると、〝カーット！〟の掛け声が掛けられてから、ＣＥはブレーキを掛けたが、ブレーキが利かず、何度もブレーキを掛けたような動作をして、最後には自らバイクを横倒しにして、自身は転倒の衝撃に耐える姿勢を取っていたと教えてくれた。また、ＭＳからも、事情徴収に対して、『ブレーキが利かないので、自らバイクを倒して、自分はバイクから離れて体を確保した』と言う話をしていた事を聞いた。

ＴＹは引き続き、ＣＥの警護任務に復帰した。しかし、ＣＥが事故のせいでバイクの運転に精神的な支障がでたので、ＴＹが代役でバイクシーンの撮影を続け、またＩＡと組んで、女性白バイ警察官が犯人の乗ったトレーラーを追跡して、トレーラーが正面を塞ぐパトカーの列を避けようとして急ハンドルを切って横転するトレーラーの下の空間を自ら白バイごと倒してすり抜けるシーンも撮影してしまった。

この後のシーンはバイクに乗るシーンはあまりなく、ＣＥが白バイ警官の格好で拳銃を片手にフェリーの乗り込み人質役のＩＭを救出するシーンを撮り終え、ドラマはクランクアップになった。

その中でＨＧが意識を取り戻したという吉報がＫＭからもたらされた。

一般病棟に移されたＨＧにＨＹが面会しに行った。

ＨＧが頭に包帯を巻いて、足にもギブスがあり、ベッドから出ていた。その姿を見たＨＹ、自然に涙が出てＨＧに抱き着いた

「いてて…」

ＨＧの言葉を無視して、ＨＹはＨＧにしがみついて泣きじゃくる。ＨＧは訳が分からずただ黙ってＨＹの締め付ける痛みに絶えていた。

ＨＹが落ち着いたところを見計らって、

「ＨＹ…」

「はい」

「ただいま」

「お帰りなさい…親父」

と言って、また涙した。

「何かあったのか？」

「…はい、実は…」

ＨＹはＨＧにＣＥの事件について報告した。それを聞いたＨＧは、ＨＹの目に浮かんでいる涙を指でぬぐうと、

「大変だったな…よくやってれた」

と言って、ＨＹの頭に手を乗せて撫ぜた。

「…親父！」

「なんだ？」

「子ども扱いしないでくれます！」

ＨＹがむくれて言った。

数日後、白山亭内…

「なんか、探偵をしているみたいで、ワクワクしちゃった」

「私もよ、面白かったね」

港町水上警察署の女性警察官ＭＳとＡＫの二人が、白山亭内で女給姿のまま会話してい

た。二人を見つけたＩＹが側に寄り、礼をいう。

「二人とも、ありがとうございます」

「「いえいえー」」

「そう言えば、ＨＧ社長意識が戻ったんですってね。良かったわね」

「はい、おかげさまで」

「社長が入院した翌日にアルバイトに来た私達にお宅の副社長（ＳＫの事、ＳＫは白山亭経営とは無関係だが、便宜的に副社長と名乗った）の説明の後にＨＹさんが『社長が戻る場所を守りましょう！』と言ったので、私達も心得て署に内緒で動いたのよ…バイト代弾んでね！」

とＭＳは言って、ウィンクした。

「はい…その件については社長が退院次第、自ら賞すると言っていました」

「「やったー！」」

「でも、良かったわよねＣＥさん、軽症ですぐに現場に復帰して撮影を再開するんだもの」

とＡＫが言うと、「（…あれ、ＴＹ姉さんなんだけど…）」とＩＹは苦笑いした。

●ＨＧ退院

「うーーん、病院で長い事寝たきり生活していたせいで体が鈍ったな…」

と言って、胸部と両足の骨折がまだ完治していないので、松葉杖をついて腰をさすりながらＨＧは病院を退院して、ＫＭの手助けで迎えに来たＨＹの車の後席に乗り込む。

「あら…ヤダー、すっかり老け込んで…もう」

ＫＭが呆れて言うと、

「うるへー」

「さぁ、帰りますよ」

とＨＹが言うと、

「頼む」

ＨＹは病院の正面玄関に止めた車を出した。担当医と看護婦が手を振っていた。

車の中で

「准尉（親父から元に戻しました(笑)作者注)、病院のＩＣＵに居た時って、どんなんでした？」

「そうだな…なんか水の中を漂っている感じだったね…なにも聞こえない、白い世界…その内複数の手があちこちから伸びてきて、俺に手を差し伸べたんだ…その内のなにか見慣れた手をいくつか掴んだら、突然引っ張られて気づいたらＩＣＵのベッドに居た…もし見知らぬ手を掴んだら、死んでたかもな…」

「…そんな…」

「ところで…」

「？？」

「俺の車どうなった？」

「燃え尽きました…」

「ナニー！」

「そんなに興奮したら、怪我に響きますよ」

ＨＹは笑いながら言った。

「あの車…気に行ってたんだけど…大事にしてたのに…」

と言って、ＨＧはしょげる

「あら、私達娘とどちらが大切ですか？」

ＨＧの言葉に嫉妬して、ＨＹが訊ねると、ＨＧは一瞬悩んで

「…無論…娘ども…と今は息子も居るか…」
「何ですか、その間は？…まぁいいです。私達が大事と言っていただければ」
「うむ」
「廃車と保険の手続きについては、軍曹が全て行ってくださいました」
「そうか…で、俺のスマホは？」
「車と運命を共にしました…」
「何だって――！！」
「こちらの方は、私達が手続きしておきました…ハイ」
と言って、ＨＹは助手席にある新品のスマートフォンの箱をＨＧにノールックで投げ渡す。
箱はＨＧが上手く受け取った。
「ありがとうよ！データはクラウドにバックアップしてあるから…」
それを聞いてＨＹは「(アッ！事故映像はもしかして…)」と思いついたが、ＳＫの言葉を思い出し、それ以上の追及はしないことにした。

「それから、准尉に追突したトラック運転手は、過重労働の上に過積載の上、業務上過失で逮捕されたそうです」
「そうか…こっちは死にかけたが、同情するね」
「そうですね」

ＨＹが白山亭の正面に車を付ける。ＩＹを始めとする白山亭の女給服を来た娘達とＴＴ、ＳＫ、ＩＩが出迎えた。
「准尉！すみませんでした！！」
いきなりＩＹがＨＧの元に歩み寄り頭を下げた。

「なんだ？一体？」

「はい、准尉が事故で入院したのを知らず、私はＩＭと任務が終わったにも関わらず、一緒に居ました。その事をお詫びします」

「…そうだったな…反省したか？」

「はい！」

●スペシャル連続ドラマ「女性歌手の乗船したフェリー乗っ取り事件、テロリストに乗っ取られたフェリー…果たして親友の白バイ警官は彼女を助け出せるのか！？」（なげータイトルだな(笑)）

「ＨＧ社長、退院おめでとうございます」

ＩＭとＣＥが母屋でまだ横になっている事が多いＨＧを見舞った。

「…お見舞いありがとうございます」

二人から見舞いの品と花束を受け取る。横でＨＹが介助する。ＩＭが

「ＨＧ社長…どうもすみませんでした」

「はて？」

「いや、社長が入院していたのにも関わらず、ＩＹを引き留め続けていたので…」

「はは、それはどうも」

とＨＧは、苦笑するが、ふと、

「それはそうと、ドラマ好調の様だね」

「はい、おかげさまで高視聴率をマークしています」

とＣＥが言う。

「あのスタントシーンはいいね…うまいと思う」

ＨＧが褒めると

「…そう言っていただけると…彼女も喜ぶでしょう！」

「？？」

「…あの実は、あのスタントシーンの…特に後半はお宅のＴＹさんが演じたので…」

「ナニー！」

と言って、ＨＧは驚いた。それを見てＩＭが

「あたしは、ＣＥが白バイ警官姿ではなくて、あたしが本当にあの事件にあった（[巻き込まれ親父の突入]参照）時の様に、ここ白山亭の女給姿に変装して救い出して欲しかったな」

と言うと、ＣＥも同調して

「そうだったのよ…私もあなた（ＩＭ）の話を聞いて、ＩＹさんやＴＹさんの様にここの女給姿に変装して活躍したかったわ…」

「あんたもそう思ってたんだ」

「そうよ、それが残念で…脚本を書いた作家に文句言ってやりたい！…だって、実際の事件をベースにしたら、なにも白バイなんて要らないじゃない」

「アハハ！そうかもね…でも、バイクアクションシーン抜いたら、あんた目立たないじゃん」

「…あなた、そこまで言う？…まぁ、そうなんだけどね…」

と言って、ＣＥはしょげる…

「ごめーん」

ＩＭが言い過ぎたのを詫びると、

「いや、バイクスタント抜きでも、格闘戦とかのアクションシーンがあるから…」

「おっと、前向きね」

「そーよ、歌手が本業のあなたと違って、ドラマ一筋の女優だもの」

「うん…頑張ろう！お互いに」

「そうね」

と言って、ＩＭとＣＥは手を取り合った。そして、ＩＭは思いついた様に、ＨＧに対して

「…そうだ、折角ここに来たんだから、あんたここの女給服着てみない？いいでしょ？社長！」

と言うと、ＨＧは素直に

「はい、いいですよ」

「やったー！」

と喜ぶＩＭを見て

「ＨＹ」

「はい」

「ＣＥさんの着付け手伝ってあげて」

「はい」

「ねぇ、社長、あたしもー」

とおねだりするＩＭにも

「はいはい」

その日、白山亭ではスペシャルドラマ番組宣伝と銘打って、ＩＭとＣＥの女給姿の共演があった。（ＣＥは模造銃持ってたり…作者(笑)）

●エピローグ

「准尉、お帰りなさいませ」

ＨＧが葛葉組への所要から戻り白山亭の扉を開けると、ＡＭがバトラースーツ（執事の服）姿で出迎えた。

「何やってる？ＡＭ、ピン芸人デビューの練習か？」

「あのですね…自分ピン芸人になりませんから…お客様から『女給姿の女の子達の接待も

いいけど、一人くらい男性の給仕が居てもいいかも…』と言う、アンケートがあって、以前からホールスタッフ姿でウェイターをしていましたが、『できれば執事姿で…』と言うアンケートが多く出だしたので、自分は反対しました。そうしたら、ＩＩさんが『じゃ、私がやろう！』と言い出し、次にＴＴさんが『私男装したいから、私やるわ！』と言い出し、ＩＹまでも『ＴＴ先輩が男装するなら、私がやりたい！』と言い出したので、自分が『なら、自分が…』と言ったら、『『どーぞ、どーぞ！』』と…で、結局、ＨＹ先輩に『あんた（ＡＭ）やんなさいよ！』と言われました…」

「よく、女装させられなかったな…」

「アハハ！」

と言って、ＡＭは苦笑いした。

その時、白山亭の入り口ドアが開き、

「いらっしゃいませ…これはＭＺ様、ようこそ白山亭へ」

入店してきたＭＺを丁寧に向かい入れるＡＭ…ＡＭの格好と仕草を見たＭＺが口に手を当てて頬を赤らめる。

この日、ＭＺはＭＰに対する毒舌も出ず、またＨＧとの掛け合い漫才にも応じず、まるで借りてきた猫の様に振る舞った。

ＭＺが帰った後、

「すごいなＡＭ…礼儀作法に品を感じる。またあのＭＺの毒舌を封じたのは見事だな…」

とＨＧが感心して言うと、

「…いやぁ…Ａ国ではセレブ達のパーティなどでボディーガードとしてクライアントをエスコートしたり、高級邸宅での住み込み用心棒などしてましたので、必要なスキルとして身につけました」

それを聞いて、

「それなら、ここで働く女給達に仕草やマナーを教えてやってはくれないか？無論、授業料は出す」

「はい、喜んで！」

ＡＭは基礎ができているＩＹ（ＩＹは元侯爵令嬢です）と協力して白山亭の２階のホールを使用して、先ずはＨＧの娘達からレッスンを始め、次にパート・アルバイトの女給、続いてＴＴ・ＩＩにもレッスンを施した。

アルバイトの総合病院の看護師や港町・水上両警察署の女性警官達に好評で、その内、別にレッスン料貰ってのリクエストでテーブルマナーやビジネスマナーについても教えだした。

その間に白山亭に遊びに来たＩＭやＣＥの目に留まり、ＭＫに話したことから、彼女達の所属する芸能事務所○×エージェンシー所属の他のタレント達にも立ち振る舞いのレッスンの依頼が入るようになった。

「…ＡＭ、お前人に教えるの上手いな、ピン芸人以外にマナー講師としてもやっていけるな」とＨＧが言うと

「…あのですね…准尉！自分は別にピン芸人になりませんから！…自分が入社した頃に准尉にビジネスマナーを教えられた頃は、それはもうグタグタでしたよ。会社辞めて准尉から教わったことが全くできていないことに気づいて、職を転々とし、その間に准尉から教わった『何事も基本・基礎が大事！どんな複雑な事も基本・基礎が理解できていれば、それらの組み合わせで対処できる』と言っていた事を思い出しながら復習して、ようやく安定した職場で働けるようになり、Ａ国に行っても色々学ぶことができました。ここまで来たのも准尉の教えが基礎になったからです」

「…相変わらず、口だけは達者だな」

「いやいやいや、これは本心ですって！」

「巻き込まれ親父の厄災　＝完＝」